作品タイトル

みえないくに

登場人物

○鴨橋真由（かもはし・まゆ）４４歳　グラゴニア語の翻訳者

○重山朝子（しげやま・あさこ）６４歳　「月銭社」企画担当の編集者

○関口蘭蘭（せきぐち・らんらん）２８歳　「月銭社」企画担当の編集アシスタント　※正式な名前は、「蘭蘭」だが、普段の表記は「蘭々」を使っている。

○許斐雅則（このみ・まさのり）４０歳　「月銭社」営業担当

○常田吾郎（つねだ・ごろう）６０歳　「月銭社」の社長

○美沙（みさ）１６歳　重山朝子の近所に住む高校生。

○外国人の男　やがて、グラゴニアの作家カレーラ・ヨゼヨゼ（女）になる。

○擬人化された砂の薔薇

あらすじ

これは、架空の国グラゴニア共和国で話されている、グラゴニア語に魅了された翻訳者の物語。鴨橋真由は、日本では、マイナー言語であるグラゴニア語を独学で学んだ、グラゴニア語研究のパイオニアだった。鴨橋は、ＳＮＳのチャットを通じて話しかけてきた外国人の小説家カレーラ・ヨゼヨゼと知り合う。

数年後、喫茶店で、鴨橋と編集者の重山朝子、アシスタントの関口蘭々が、「グラ日・日グラ辞典」という辞書の出版企画が「月銭社」の社内会議で通ったことを喜び合っている。重山は、社内に、「マイナー外国語の辞書を出版するなんて、弱小出版社には荷が重い」という意見もあったが、「グラゴニア人小説家のカレーラ・ヨゼヨゼが、次のノーベル文学賞を獲るのではないかという噂もあり、なんとか説得した」と言う。定年を間近に控えた重山からの引き継ぎのため同席していた関口は、グラゴニアについても、カレーラ・ヨゼヨゼについても全く知らなかったので、鴨橋にカレーラがどんな人なのか尋ねる。鴨橋は「自分も直接会ったことないが、男性に扮した女性の小説家だろう」と答える。鴨橋と重山は、契約書にサインを交わし、喜び合う。そこに、グラゴニアが隣国に侵攻した、と

いうニュース速報が飛び込んでくる。

事態は急転する。一週間後、「月銭社」の社内では、急遽、「グラ日・日グラ辞典」の出版計画を延期もしくは白紙にする会議が開かれる。そこに呼ばれた鴨橋は、なんとか「グラ日・日グラ辞典」を出版しようと奮闘するが、そもそも「グラ日・日グラ辞典」の出版に反対で、重山を目の敵にしていた営業担当の許斐雅則と対立する。重山と協力しながら、月銭社の社長：常田吾郎の説得に成功したのも束の間、「カレーラ・ヨゼヨゼが、グラゴニアの軍事侵攻を支持する表明をした」というネットニュースが会議室に入って来る。

数週間後、会社に来なくなった重山を心配して、蘭々が鴨橋をコーヒーショップに呼び出す。蘭々は「重山に会いに行ってほしい」と鴨橋に頼むが、鴨橋は「合わせる顔が無い」と躊躇する。蘭々の行動を妨害しようとすぐそばで隠れていた許斐は、蘭々と鴨橋のやりとりを盗み聞きしながら翻意し、鴨橋に「重山に会いに行け」と促し、その場を去る。

会社を休み、部屋に引き篭っている重山。定年退職前に意義のある本を出したいと思っていた重山にとって、「グラ日・日グラ辞典」は最後の夢だったが、カレーラ・ヨゼヨゼの軍事侵攻支持の表明のため、出版が延期になったことで、深く落ち込んでいた。近所に住む高校生の美沙がやってきて、重山を励ます。重山はなんとか起き上がれるようになるところまで、立ち直る。そこへ、月銭社の社長の常田が訪ねて来る。重山と常田はかつては恋人同士だったこともあり、会社でも志を同じくする同僚だった。しかし、常田は会社の存続を考えて、「グラ日・日グラ辞典」は正式に中止すると伝えに来たのだった。重山と常田は、分かり合うことがないまま、常田は重山の部屋を出て行く。その直後、鴨橋が訪ねて来て、これからカレーラ・ヨゼヨゼを探しに、グラゴニアに向かうと重山に告げる。美沙も加わって、三人は、グラゴニア語を学び続けることを誓う。

第1場　鴨橋の部屋

舞台上の中央後方に大きな本棚がある。それは、場によって個人の書斎の本棚、ブックカフェの本棚、出版社の本棚に見えるが、さらに読書という文化を象徴する抽象的な装置に見えると尚良い。他に、七脚の椅子がある。一つは鴨橋の椅子でその前に書き物机がある。他六つは、外国人の男の椅子である。俳優たちが舞台に入って来る。それに合わせて客電が落ちていく。俳優たちは、舞台上に置かれた銘々の椅子に座っていく。鴨橋真由を演じる俳優は舞台上の机の前に座り、パソコンのキーボードをタイプする仕草。それに合わせて、パソコンのキーボードをタイプする音が響く。

鴨橋　私、翻訳者は透明な存在であるべきだって、思ってたんです。

鴨橋が、（客席の方向を向き）椅子に座って、パソコンでチャットしている。チャット相手である外国人の男は、他の六人の俳優たちによって演じられる。それは、ＳＮＳだけで繋がっている会ったことがない人々を表している。外国人の男５だけは、後ろ向きに座っていて、顔が見えない。

外国人の男１　透明？

鴨橋　はい。作者の言葉を、別の言語に忠実に移す。そこに翻訳者の個性なんて入っちゃいけない。ずーっとそう信じて翻訳してきました。でも最近は、それも違うんじゃないかって思うようになってきて。

外国人の男２　どう違うの？

鴨橋　訳文が一（ひと）パターンしかないなんてありえないんですよ。原文の一つの言葉で、いろんな日本語の言葉を思いついちゃう。正解はない。でも翻訳者は選ばなきゃいけない。

外国人の男３　そこに個性が出ると？

鴨橋　はい。

外国人の男１　原文が極端に短いものだったら、訳文に違いは出ないんじゃないかな？

鴨橋　じゃあ例えば、日本語の「言葉」を、英語でなんて訳します？

外国人の男２　言葉は、、、ワード（word）、だろ？

鴨橋　スピーチ・リーフ（Speech Leaf）とも訳せる。

外国人の男４　スピーチ・リーフ？

鴨橋　コトバは、コトとバに分けられて、コトは「言う」、バは「葉っぱ」を意味するんです。大昔の日本人は、「事柄を口から吐き出して茂らせること」、それが「言葉」だって考えた。だから言の葉で、言葉。

外国人の男５　それは訳じゃなくて語源なんじゃ？

鴨橋　でも作者が言葉を、「事柄を口から吐き出して茂らせること」って言う意図で使って

いたら？ 人は、葉っぱを吐き出すように苦しみながら意味を吐き、他者とコミュニケーションする生き物なんだ、そういう思いを込めていたら？

鴨橋、口から葉っぱを吹き出すマイム。

鴨橋　おええええ。

外国人の男（全員）　ははは。

鴨橋　翻訳者は透明な存在ではいられない。良くも悪くも作者の意図を照らす、蝋燭の灯りみたいな存在で、それによって翻訳という影は、形が変わるんです。

この鴨橋の台詞に合わせて、外国人の男５の影は大きくなる。

外国人の男１　なるほど、おもしろいな。

外国人の男５　日本人は葉っぱを吐き出してコミュニケーションする民族ってことだよね？

外国人の男３　ゲロした葉っぱでコミュニケーションしてるってこと？

鴨橋　そう、日本人も日本語もユニークなんです。

外国人の男２　不思議だ。こうやって互いの母語を使わず、英語でチャットしてると、言葉が何を意味するかについて、より深く考えてしまう。

外国人の男４　言葉。

外国人の男６　スピーチ・リーフ。

外国人の男５　あなたのおかげで変なストーリーを思いついちゃったよ。

鴨橋　変なストーリー？

外国人の男５　（立ち上がり）実は私、小説家なんだ。

鴨橋　小説家？

音楽が流れ始める。外国人の男５は、振り返る。顔は布で隠されているが、少しだけその表情が見える。

外国人の男５　うん、グラゴニアで小説を書いてる。今思いついたのは、こんな話。「昔々、砂漠で女が一人心細げに立っていた。女はお腹に薔薇を妊娠していたから。」

鴨橋　薔薇を妊娠？

外国人の男５　そう、「お腹に薔薇のつぼみを孕んでいた。女のお腹は、まだ目立って大きくはなかったが、彼女は自分のお腹の中に薔薇のつぼみがいることを確かに感じていた。ある時、女はつわりで苦しんで思わず吐いてしまった。しかし口から出て来たのは、、薔薇の葉だった。」

鴨橋が空を見上げると、空から、掌ぐらいの大きさの薔薇の葉が、小雪がちらつくように数枚降ってくる。外国人の男５、消える。鴨橋は、落ちてきた葉を拾い集め

る。葉には小さな穴が開いていて、鴨橋はポケットからリングを取り出して、拾った葉を単語カードのようにして、まとめていく。やがて、鴨橋はグラゴニア語を勉強し始める。転換。

第2場　コーヒーショップ

冬。日本の二月頭頃。四名用のテーブルに、椅子も四脚。向かい合っている鴨橋真由と関口蘭々。座っていない方の椅子に、それぞれのコートやマフラーが掛けられている。蘭々が、手渡された鴨橋のｉＰａｄの画面を見ている。

蘭々　え？　四種類ってどういうことですか？
鴨橋　出来上がっていく時代がそれぞれ違って、四種類になったんですよ。
蘭々　（ｉＰａｄの画面上で、四種類を数えながら）一つの言語で、四種類も？
鴨橋　はい。
蘭々　え？　やばくないっすか？
鴨橋　え？　やばい？
蘭々　はい、やばいっすよね？
鴨橋　それは、、、いい意味？　悪い意味？
蘭々　どっちもっす。だってやばいじゃないすか？　それ覚えられるんすか？　文字、四種類も。
鴨橋　ネイティブはもちろん。
蘭々　（空中に文字を書く仕草）書いて？
鴨橋　はい。文字ですから、書いて覚えるんだと思います。
蘭々　ええ？！　外国人は？　我々は？
鴨橋　正直言って最初は難しいんです。でも少しずつ、本当に少しずつなんですけど、（文字を覚えていった経験を思い出し）覚えていくと快感になるというか。なんかこう、美しいなあって感じるようになっていくんですよ。段々と、小人が可愛いダンスを踊っているようにも見えてくるっていうか。
蘭々　異国の文字たちが踊る？
鴨橋　踊ります。頭の中で、ですけどね。
蘭々　（フラメンコのポーズをしながら）フラメンコすか？
鴨橋　いや、スペインじゃないんで。
蘭々　（タンゴのポーズをしながら）タンゴ？
鴨橋　うーん、違いますけど、ま、まあ、そんな感じです。
蘭々　鴨橋先生、、、やばいっすね！
鴨橋　「やばい」と思います。だって読めない時から、グラゴニア語の文字がとても好きだったんですから。

鴨橋、空中に文字を、下から上へ書く仕草をして、その文字が踊り始めるのを、う

っとりと眺める。「小人の踊り」を表す音楽が入る。

鴨橋　ふふふ。

蘭々　やばいっていうか、危険領域入ってますね。

鴨橋　気を付けます。

蘭々　先生、文字を（手を下から上に動かして）こう書いてるのは、どういう意味なんですか？

鴨橋　ああ、グラゴニア文字って、下から上に向かって書いていくんですよ。

蘭々　（驚いて）はい？　下から上？

鴨橋　大昔は、木の枝の表面に、ナイフで文字を刻みつけてたんです。ナイフで手前から遠くのほうに向かって文字を刻んでいって、最後に枝を立たせると、

蘭々　下から上だ！

鴨橋　書く媒体が紙になっても、そのやり方が残った。さすがに現代では、それを九十度回転して、左から右にも書くようになったんですけどね。西洋の影響で。

蘭々、鴨橋にｉＰａｄを差し出して、

蘭々　ちょっとここに書いてもらってもいいですか？

鴨橋　え？　何を？

蘭々　私の名前を、グラゴニア語で。大昔の書き方で！

鴨橋　あ、はい。お名前、関口、、蘭々さんでしたよね？

蘭々　はい！

鴨橋、ｉＰａｄに、グラゴニア語で「せきぐちらんらん」と指で書くと、「小人の踊り」を表す音楽が入る。書き終えた鴨橋、蘭々にｉＰａｄを渡す。

蘭々　これが？

鴨橋　「せきぐちらんらん」という音をグラゴニア語で書きました。

蘭々　読めない。

鴨橋　そりゃそうですよ。

蘭々　でも、、、小人が、、、踊ってますね！

鴨橋　でしょ？

店のドアの音がカランコロンと鳴る音に続き、誰かが走って二人のテーブルに近づいてくる足音。

重山の声　お待たせ、ハア、ハア、しました、ハア、ハア。

重山朝子が、息を切らして、入って来る。

鴨橋　大丈夫ですか？ 重山さん。
重山　ハア、大丈夫です、ハア。
蘭々　大丈夫じゃなさそうすよ。座ってください。
重山　（立ったまま）先生、（頭を下げて）申し訳ないです。こんな大事な日に遅れてしまって。
鴨橋　私は別に。関口さんもいらっしゃいましたし。
蘭々　丁重にもてなしときましたから。

蘭々、重山にウインクする。重山は、鴨橋と蘭々と二人きりにさせてしまったことを気にしていたのだが、それは表情に出さず、

重山　関口さん、ありがとう。（と言って座る）
蘭々　お互い様っすから。お孫さん、大丈夫でした？
鴨橋　！
重山　うん、そっちはなんとか。
鴨橋　え？ お孫さん、いらっしゃるんですか？
重山　あ、はい。今年高校生の初孫が。
鴨橋　え？ 高校生？
重山　はい。
鴨橋　驚きました。そんなお歳には見えないから。
重山　もう六十四ですから。
蘭々　来年、定年ですもんね。
重山　、、（蘭々を睨む）
蘭々　あ、すみません。
重山　ほんと言うと、孫じゃないのよ。近所の高校生の友だちで。
蘭々　高校生の友だち？
重山　ほらあ、そんな反応するでしょ？ だから、孫って言ったほうが余計な説明しなくて済むから。
鴨橋　高校生のお友だちがいるんですか？
重山　ご近所の子なんですけど、ご両親が忙しい時に預かったことがあって、勉強見てあげたりしたんですけど、そしたらなんか懐いちゃって。
蘭々　野良猫に好かれる猫ばあさんみたいな？
重山　、、（蘭々を睨む）
蘭々　そうそう（誤魔化すように）今、鴨橋先生にグラゴニア語について聞いてたとこなんすよ。これ、「らんらん」って書いてもらったんだ。
重山　あ、ほんとだ。
蘭々　（驚いて）重山さん、グラゴニア語読めるんすか？
重山　うん、一年かけて、文字覚えたの。

蘭々　え？　四種類を？
鴨橋　すごいですよね。
重山　なんとかの手習いってやつで。
蘭々　え？　なんのために覚えたんすか？
重山　だって私、鴨橋先生の担当だしそれに、、、老後の趣味？
蘭々　もしかして、定年退職したら翻訳家を目指そうとか？
重山　！
蘭々　それ無理じゃないっすか？
重山　（チラチラと鴨橋の表情を見ながら）わ、わかってるわよ。だから趣味だって言ってるでしょ？
蘭々　翻訳ってそんなに簡単なものじゃないすよね？　こんな人気のない言語でも、、
重山　（遮って）こら、関口！
蘭々　あ、すみません。重山さん、コーヒーでいいすか？　私、買ってきます。ここ、グラゴニア産のコーヒーが飲めるんです。
重山　え？
鴨橋　（手元にあったマグカップを手に取り）そうなんですよ。
蘭々　重山さん、楽しみにしててください！

蘭々、逃げるように、コーヒーを買いに行く。

重山　すみません。
鴨橋　いえ、慣れてますから。
重山　私は慣れないんだよなぁ、彼女の口の利き方。
鴨橋　あ、そっち？
重山　え？　それじゃなくて？
鴨橋　グラゴニア語が、マイナーな言語って言われることではなく？
重山　それもなんですけど、ああいう失礼な発言を連発する関口自体。
鴨橋　最近の子なんて、あんなもんなんじゃないんですか？
重山　いやいや、学生じゃないんですから。あの子、優秀なのに言葉遣いが変なところが直らないんですよね。敬語も使えてんのか使えてないのか。
鴨橋　わざとなんじゃないですか？
重山　わざと？
鴨橋　わざとっていうか、無意識？　上下関係作らないぞっていう。
重山　イラっとしません？
鴨橋　私は別に。敬語がない言語もたくさんありますし。むしろ、（前のめりに）若者言葉がどう変わろうとしているのか、興味あります。
重山　さすが、言語の専門家！
鴨橋　関口さんには「やばい」って言われました。
重山　たしかに先生はちょっと「やばい」かもしれませんね。

重山と鴨橋、笑い合う。

鴨橋　でも嬉しいなぁ。グラゴニア産のコーヒーが、日本で飲めるなんて。私がグラゴニア語を始めた時代には考えられなかったから。

重山　最近なんでしょうか？　カルディとかで、グラゴニア産のコーヒーとかチョコレートを買えるようになったのは？（手帳を取り出し、メモを取り始める）

鴨橋　ここ数年ですよ。それまでは、軍事政権が貿易の窓口を独占してて、限られた国としか取引をしなかったですからね。

重山　ずっと鎖国状態だったんですよね？

鴨橋　戦後七十年ぐらい。大昔から大国に翻弄されてきたという歴史があって、被害妄想が強い国ではあるんですよ。でも今の開放政策がうまくいって、政権も民主化していけばいいなあって私は思ってて。

重山　きっと、そうなっていきますよ。その内、観光ビザも取りやすくなって、簡単に行けるようになって、私たちが行ったら、オルパブー（「こんにちは」の意）、オルパブー。人懐っこいグラゴニア人たちがいたるところで握手を求めてきて、現地で食べるグラゴニアのレンズ豆のスープや、ヒヨコ豆のサラダが、これがもう、とっても美味しいんです、きっと。

鴨橋　（驚いて）重山さん、ずいぶんグラゴニアについて調べられたんですねぇ。

重山　はい、言語と文化は繋がってますから。知りたくなっちゃって。

鴨橋　重山さんも、やばい。

重山と鴨橋、再び笑い合う。重山は姿勢を正して、

重山　改めまして、おめでとうございます。

鴨橋　ありがとうございます。全部、重山さんのおかげです。

重山　よかったです、本当に。

鴨橋　奇跡ですよ。グラゴニア語なんていう、こんなマイナー言語の辞書が出版できるなんて。

重山　しかもうちみたいな弱小出版社から？

鴨橋　はい。

重山　ひどい。

鴨橋　あ、すみません。

重山と鴨橋、笑い合う。

鴨橋　でもどうやって社長さんを説得したんですか？

重山　あ、いや、社長っていうか、営業部ですね。

鴨橋　営業部？

重山　うちは営業部が強いんですよ。社長は「トータルで利益を出せばいい」っていう考えなのに、営業部は、「一冊一冊が勝負だ」って。「一冊毎に利益出せ、売れない本を出してくれるな」って。

鴨橋　営利企業ですもんねぇ。

重山　でもねえ、いつもいつも利益だけしか求めないで、焼き畑農業みたいなことだけしていたら、世の中は砂漠みたいになっちゃうと思うんですよ。まして、うちの主力商品って受験ガイドですよ？　これ以上、受験戦争過熱させて、子どもたち燃やして、どうするんだって。

鴨橋　（驚いて）それも言ったんですか？

重山　いえ、さすがにそれは言ってないです。

鴨橋　あ、よかった。

重山　種を蒔く仕事をしたいんですって言ったんです。儲からなくても、最後だからお願いしますって。

鴨橋　ありがとうございます。

重山　私こそ、やりがいのある仕事ができてよかったです。

鴨橋　あのう、

重山　（何だろうと思いながら）はい。

鴨橋　翻訳家、目指せると思いますよ。

重山　え？

鴨橋　もちろん、そんなに簡単ではないってのはそうなのですが。

重山　やだ、先生。趣味ですよ、趣味。

鴨橋　音素文字の、アムオル文字を覚えるところまで行ける人はたくさんいるんです。でも重山さんは、アナカタク文字やアナガリヒ文字まで頑張って覚えましたよね、一年で。

重山　、、、イジュナク文字はまだ全然ですから。

鴨橋　イジュナクは、私だってまだ読めないイジュナクたくさんありますから。

重山　（驚いて）そうなんですか？

鴨橋　そうですよ。わからないイジュナクが出てきたら、写メして、ネイティブの友達に聞いてますから。

重山　先生でも？

鴨橋　はい。だから、もちろん時間はかかりますけど、、、目指してください、グラゴニア語の翻訳家。

重山　、、、（真剣に）この歳でですか？

鴨橋　はい。

重山　、、、間に合うかどうか。ぎりぎりだと思いますけど。

鴨橋　絶対間に合いますよ。人生百年時代なんだから。

重山、鴨橋の目から視線をはずす。

鴨橋　すみません、無責任だ私。そんなに簡単じゃない。学習者から翻訳者になる壁はか

なり高いですから。私、グラゴニア語の仲間を増やしたくて、つい、、、

重山　目指してみます。

鴨橋　え？

重山　いや、実はもう目指してまして、、、

鴨橋　（笑顔になって）はい。

重山　その夢のために、営業部、必死で説得しましたから。

蘭々、コーヒーを持って、戻ってくる。

蘭々　お待たせしました。期間限定バレンタイン・グラグラ・濃厚チョコレートプディングトッピングモカ。

鴨橋・重山　はい？

蘭々　グラグラはグランド・グラゴニアンの略で、香ばしいグラゴニア産のコーヒー豆で淹れたモカに、グラゴニア産のカカオをたっぷり使ったチョコレートプディングトッピングしました！

蘭々が持ってきたコーヒーは、高さ５０ｃｍはあるかもしれない、巨大なパフェのようなコーヒー。

重山　何考えてるの？

蘭々　え？

重山　それお婆ちゃんが飲むもんじゃないでしょ？ そのネーミングも、この高さも。

蘭々　何言ってんすか、まだ全然若いじゃないすか。

重山　もうすぐ定年だってさっきからかったじゃない。

蘭々　だから反省したんす。はい。（と言って、重山の前にパフェを置く）

重山　お腹、冷えちゃうよ。普通のホットコーヒー買い直してきて。

蘭々　え？ いいですけど、これはどうするんですか？

重山　関口さんが食べて。

蘭々　私、こういうゴテゴテしたの苦手なんで。

重山　自分が食えん物を買ってきたのか？

蘭々　重山さんに合うものって思って。

重山　合わねえから。

蘭々　食わず嫌いよくないなあ。

重山　大体、壁みたいになってるぞ？ 鴨橋先生の顔見えないぞ？

鴨橋　私、食べましょうか？

蘭々　大丈夫ですか？ これですよ。

鴨橋　大丈夫です。こういうゴテゴテしたの好きなんですよ。

蘭々　ありがとうございます。

重山　はい、じゃもっ一回、私のホットコーヒー。

蘭々　かしこまり。

蘭々、もう一度、ホットコーヒーを買いに行く。

重山　すみません、うちの若手が、、、

鴨橋　食べてみたかったんですよ。誰かが頼んでくれなきゃ一生食べないですよ、こんなの。

重山　先生、前向きですねぇ。

鴨橋　（食べながら）美味しいですよ。重山さんも食べませんか？

重山　大丈夫です。私、お腹冷えやすいんで。

鴨橋、美味しそうに、巨大なコーヒーパフェを食べている。

重山　あ、どこまで話しましたっけ？

鴨橋　（モグモグしている）メーギョームめっもくみまももまめ。

重山　え？

鴨橋　（口を隠しながら）営業部説得したところまで。

重山　ああ、そうでした。

鴨橋　モモマだけで説得できたんですね！

重山　え？

鴨橋　あ、（口を隠しながら）ごめんなさい。言葉だけで説得できたんですね！

重山　そこはやっぱり、お金もっていうか、戦略はありました。

鴨橋　モンマ戦略ですか？

重山　（気になるが、気にせず）カレーラ・ヨゼヨゼですね。

鴨橋　（食べながら）マ、モモメ、マメーマ・モメモメ？（あ、そこでカレーラヨゼヨゼ？）

重山　（営業部を説得する風に）「カレーラ・ヨゼヨゼはいつか、ノーベル文学賞を獲ります。もしかしたら今年の可能性だってある。その時に後悔しても遅いですよ」って。

鴨橋　マイマアミ（無い話）じゃないですからね。

重山　マイマーミ？

鴨橋　（急に身震いして）これ、全部食べなくてもいいですよね？

重山　はい、無理しないでください。

鴨橋　お腹いっぱいになっちゃった。

鴨橋が、パフェを横に除ける。

鴨橋　今、例のカレーラ・ヨゼヨゼの『砂の薔薇』を翻訳してるんですが、もしかしたら、これ一本だけでもノーベル文学賞に値するんじゃないかって私は思ってて。

重山　先生、その翻訳が完成したら、うちから出版させてください。

鴨橋　もちろんそのつもりです。むしろこちらこそよろしくお願いします。そうだ、（鞄か

ら原稿を取り出しながら）読んでいただけませんか？ 第一章の翻訳第一稿、お渡ししようと思って、持って来たんだった。

重山　いいんですか？

鴨橋　営業部、説得していただけるのなら。

重山　絶対、企画ＯＫさせます！（原稿を受け取る）

鴨橋　本当だったら、辞書より先に出したいくらいなんですけどね、さすがにそれは間に合わないから。

重山　（表紙を読んで）砂の薔薇。（ページをめくり、原稿を読み）「昔々、砂漠に女が一人心細げに立っていた。女はお腹に薔薇を妊娠していたから。」これ、面白そうですね。

蘭々が戻ってくる。

蘭々　はい、つまらない普通のコーヒーです。

重山　その「つまらない」いる？

蘭々　（愛想良く）はい、コーヒーデス！ あ、これでいいのか。

重山　うん、それでいいの、それお願い。（鴨橋に）これ、後でゆっくり読ませていただきますね。（原稿を鞄にしまう）

蘭々　何の話してたんすか？

鴨橋　カレーラ・ヨゼヨゼ。

蘭々　ああ、カレーラ・ヨゼヨゼ。舐めてんのかって名前ですよねぇ？

重山　お前が言うな。関口蘭々。

蘭々　私のはただのキラキラネームじゃないすか？ カレーラ・ヨゼヨゼは、、華麗なのか、（ヨボヨボを言うように）ヨゼヨゼーなのか、どっちだよ？って名前じゃないですか？「余生が、余生が」って、え？ やっぱ、お爺さん？

鴨橋　私も直接会ったことはないんですよね。

重山・蘭々　え？

重山　そうなんですか？

鴨橋　はい。

重山　やりとりは？

鴨橋　メールや（ｆａｃｅｂｏｏｋの）メッセンジャーでできますし。

重山　あ、そっか。

蘭々　じゃあ女かもしれないじゃないすか？

重山　カレーラは、グラゴニア語では男性の名前なの。

鴨橋　そうなんですけど、、、きっと女性だと思います。

重山・蘭々　え？

蘭々　（驚いて）そうなんすか？

重山　（驚いて）私男性だと思ってました。

鴨橋　そう思わせてるとは思うんですけど、

蘭々　え？ え？ どういう意味？

重山　ペンネームってことですか？
鴨橋　はい。
重山　なぜ女性だと？
鴨橋　勘なんですけど、文体が露骨に男性的に感じる作品が多くて。それにグラゴニアの軍事政権は、女性が発信力を持つことを望んでいないっていう事情もありますし、、、
重山　男じゃないと作品を発表しにくいってことですか？
鴨橋　はい。それに対してこの『砂の薔薇』は、まるで本性を現わしたかのように、とても女性的な作品だから。
蘭々　うわぁ、ミステリアス。文学による男装の麗人。あれ、そもそもグラゴニアってどこにあるんでしたっけ？ 砂漠の国でしたよね？
鴨橋　はい。国土のほとんどが砂漠なんですけど、チコチコ海に面した小国で、、、
蘭々　ああ、チコチコ海の近く。
重山　こら、関口、そもそもチコチコ海がどこにあるのか、わかってないでしょ？
蘭々　あ、わかってないの、わかりました？
重山　ちゃんと基本の知識は勉強してね。仮にもうちは、日本初のグラゴニア語の辞書を出版する会社になるんだし、あなたは私の担当を引き継ぐんだし。
蘭々　はい。（逃げるように話題を変えて）じゃ、みんな揃ったのでそろそろ本題に。
重山　はい。（鴨橋に）鴨橋先生、今日は遅刻してすみませんでした。
鴨橋　いえ。
重山　関口からお話しをさせていただいたと思いますが、先日の社内会議を経て、『グラ日・日グラ辞典』を、我が社で出版させていただくことになりました。
蘭々　よっ！ おめでとうございます。

蘭々、拍手する。

鴨橋　ありがとうございます。

鴨橋、少し涙ぐむ。

重山　十年越しの苦労が報われましたね。
鴨橋　これも関口さんと重山さんのおかげです。
蘭々　（誇らしげに）私はまだ何もしてないですけど。
重山　わかってますよ。先生の社交辞令です。
鴨橋　辞書があるかないかってものすごくその言語の学習者にとって重要なことなんです。

重山、うなずく。

鴨橋　グラゴニア語は、グーグル翻訳でも対応していない言語ですから。興味を持って、意味を知ろうと思っても、手がかりすらないってことだから。

蘭々　すみません、グーグル翻訳できない言語なんてあるんすか？
鴨橋　ありますよ、たくさん。
蘭々　マジっすか？
鴨橋　専門家によって数え方はまちまちですけど、世界には三千から七千の言語があるのに、グーグル翻訳が対応しているのは百言語と少しだけ。つまりグラゴニア語は、テックジャイアントから見捨てられた小人なんです。

蘭々と重山、鴨橋の冗談を意外と思い、つい目を合わせてしまう。

鴨橋　え？ 今のダメ？
蘭々　やばいっすね。
重山　先生はすごいですよ。そういう状況で、独学でマスターされて。
鴨橋　いえ、私はただ「やばい」人なだけですから。
蘭々　あ、ご自分でおっしゃった。
鴨橋　その言語の話者を増やすには、一人変な人がいるだけじゃダメなんです。真っ暗闇じゃダメなんです。普通の人についてきてもらうには、手元灯りが必要で。
重山　私もそう思います。一緒に完成させましょう。その手元灯り。（思わず、鴨橋の手を握る）
蘭々　重山さん、感動的シーンはいいんですけど、早く契約しましょうよ。
重山　はい、では、『グラ日・日グラ辞典』の出版契約にサインを。

重山、鞄から書類を取り出し、契約の準備をする。蘭々、テーブルを少し片して、書類を置けるようにする。

重山　メールでお送りしておりますが、今一度、ご確認ください。

重山、書類を二部、鴨橋に渡す。鴨橋、パラパラとページをめくり、メールで読んだものと相違がないか確認する。

鴨橋　はい、問題ないです。
重山　では、こちらとこちらにサインを。

鴨橋が書類に署名しようとすると、蘭々のスマホの通知音が鳴る。

重山　こらっ、関口！
蘭々　すみません、雅（まさ）さんからＬＩＮＥだ。
重山　ちょっとお。後にしてよ。
蘭々　あ、ちょっと。すみません。

蘭々、席を立って、三人のテーブルから少し離れたところで、スマホをチェックする。

重山　すみません、うちの若手が、、、

鴨橋　サインしちゃっていいですよね？

重山　はい、もちろん、どうぞ。

鴨橋が書類に署名する。

重山　ありがとうございます。これで契約成立ですね。

蘭々、三人のテーブルに戻って来て、

蘭々　重山さん、ヤバいっす。

重山　何がヤバいの？

蘭々　これ、グラゴニアって書いてありますよね？

重山　あなた、字も読めなくなったの？

蘭々、自分のスマホを重山に見せる。

重山　え？

鴨橋　どうしたんですか？

蘭々　グラゴニアが隣の国に侵攻したって。

戦車が侵攻していく音。グラゴニアの隣りの国の少女（名前：ミリアム）が手に薔薇を持って、走って登場。少女が頭上の飛行機に気がつき、立ち止まって上を見た瞬間。爆弾が爆発する音。少女は倒れ、手に持っていた薔薇は投げ出される。舞台上の中央後方にあった大きな本棚が崩れ、棚に入っていた大量の本が崩れ落ちていく中で、舞台は転換していく。音楽が聞こえてくる。鴨橋、重山、蘭々は、軍事侵攻が、まるで自分の国の、目の前で起こっているように感じられ、胸が苦しくなる。すると、カレーラが現れ、小説『砂の薔薇』の内容を語り始める。その語りに合わせて、鴨橋は少女が落とした薔薇を拾い上げ、見つめる。

カレーラ　「私のお腹には、薔薇のつぼみがいる。」でも、村の人々には、その女が吐いた薔薇の葉は見えなかった。見えないのだから、女の話も信じられなかった。それでも女は喋り続けた。私のお腹には、薔薇のつぼみがいる。今は見えなくても、いつか姿を現すんだ。」

カレーラ（村人1として）　「その薔薇ってのは何なんだい？ 喉を潤してくれるのか？」

カレーラ（村人2として）　「その薔薇ってのは食べられるのかね？」

カレーラ　「いいえ、喉を潤しもしないし食べられもしない。ただ美しいの。そしていい香りがするの。」

カレーラ（村人1として）　「香りなんかよりも、雨を降らせてほしいんだよ、俺たちは！」

土砂降りの雨の音。やがて、小雨に変わっていく。

第3場　鴨橋の部屋・カレーラの部屋（回想）

第1場より半年ほど後。十一月頃。カレーラは椅子に座り、パソコンのキーボードをタイプする仕草を始め、話し始める。鴨橋も椅子に座る。舞台上で三間ほどの距離を挟んで二人は向き合っている。自分の部屋のパソコンを通して、相手と繋がっている態。日本は深夜。グラゴニアは昼間。

カレーラ　ＧＯ！Ｕ！（豪雨）。

鴨橋　激しい大雨。

カレーラ　ＳＨＩＢＵＫＩ・ＡＭＥ（繁吹き雨）。

鴨橋　風に吹かれて飛び散るように降る雨。

カレーラ　ＮＩＷＡＫＡ・ＡＭＥ（俄雨）。

鴨橋　にわかに降り出し、短時間で降り止む雨。

カレーラ　ＹＵＤＡＣＨＩ（夕立）。

鴨橋　夏の夕方に、ざっと降って、さっと止む雨。

カレーラ　（笑って）ＺＡ、ＳＡ。

鴨橋　おかしいですか？

カレーラ　うん。音がおもしろい。ＫＩＴＳＵＮＥＮＯ・ＹＯＭＥＩＲＩ（狐の嫁入り）。

鴨橋　日が照っているのに、急にぱらつく雨。

カレーラ　狐が結婚式をすると、晴れてても雨が降る？

鴨橋　日本では、狐は人の心を惑わす動物なんです。それに、結婚式はめでたい日だけど、嬉しかったり寂しかったりして泣く人もいるでしょ？ 狐の親も、娘が嫁入りする時に涙を流したんだと思う。

カレーラ　なるほど。ＳＨＩＧＵＲＥ（時雨）。

鴨橋　秋の終わりから、冬の始まりにかけて、降ったりやんだりする雨。

カレーラ　秋の終わりから、冬の始まりに、（音を味わって）ＳＨＩＧＵＲＥ。この音も好き。美しい。日本語は、雨を表す言葉が美しい。しとしとと、しょぼしょぼと、ぽつぽつと、ぽつりぽつりと、ぱらぱら、ばらばら、ちらちら、ちらほら、そして、ざあざあと。

鴨橋　今、東京では雨が降っています。

カレーラ　ざあざあと？

鴨橋　さっきまでは、ざあざあと。今は、しとしとと。

鴨橋が自分の部屋の窓の外を見る。すると、シンクロするように、カレーラも自分の部屋の窓の外を見る。グラゴニアの窓の外は砂漠の景色。そして、グラゴニアには四季がない。雨の音が、二人の耳に響く。

カレーラ　雨を表す言葉の音から、雨の匂いが香ってくる気がする。（目をつぶって、想像するように）ＳＨＩＴＯ、、ＳＨＩＴＯ。

鴨橋　（思い出し笑いして）本当に日本語を学びたかったんですね。

カレーラ　え？ 急に何？

鴨橋　実は私、あなたのこと、最初、国際ロマンス詐欺かと思ったんです。

カレーラ　国際ロマンス詐欺？ 何それ？

鴨橋　外国に住んでいる相手とＳＮＳで知り合いになって、好意を持たせたり、恋愛感情を抱かせたりして、お金をだまし取る詐欺。今、世界中で流行ってるんですよ。

カレーラ　私はあなたを一度も口説いてない。日本語を教えてくれないかと尋ねただけだ。

鴨橋　ＳＮＳで？ 会ったこともない人に？

カレーラ　グラゴニアからできる限り遠い、馴染みのない国の言葉を選ぼうと思ったんだ。

鴨橋　「あなたの国に興味があります」って言って近づいて来るのが、国際ロマンス詐欺の手口の一つ。

カレーラ　なるほど。でも私は、日本語を教えてもらうこと以外は要求しなかった。新しい小説を書くために、未知の言葉の概念と出会いたかった。それで日本語を選んだ。フェイスブックを検索してたら、アルゴリズムがあなたを示した。偶然に感謝したい。こんなにもたくさん雨を表す語彙を持つ言語を、知ることができたんだから。

擬人化された砂の薔薇が現れる。

鴨橋　日本では雨がよく降るから、自然と雨を表す言葉が増えていったんだと思います。でも、グラゴニア語にだって、匂いを表す言葉がたくさんありますよね？「オヨフコプカス」に、「アヌコプカス」、他にもたくさん。私はそれが羨ましい。

カレーラ　、、、

鴨橋　え？ どうしたんですか？ 私、なんかまずいこと言いました？

カレーラ　珈琲、カカオ、そして温室の薔薇、、、

音楽が流れる。同時に、常田、許斐、蘭々、重山、美沙を演じる俳優たちが、舞台に入って来て、アルファベットの文字（どことなく、STARBUCKS や McDonald's、GAFAM のロゴを連想させる配色だが、はっきりとは示さない）が大きく刻印された、ファストフードの包み紙やコーヒーショップのカップ、本を、擬人化された砂の薔薇に向かって、投げつけるように捨てていく。

カレーラ　世界が（ローマン・）アルファベットで覆われていく。

鴨橋　カレーラ？

カレーラと鴨橋、退場。擬人化された砂の薔薇、アルファベットの山を前にして立ち尽くす。アルファベットを捨てた俳優たちが去ると、擬人化された砂の薔薇も退場。舞台上に、常田吾郎が現れる。空間は、「月銭社」の会議室に変わる。

第４場　出版社「月銭社」の会議室

第２場から五日後。窓がある会議室。。

朝九時半頃。常田は十時からの会議のことを考えている。そこへ、許斐雅則が入って来る。許斐の手には、いくつか絆創膏が貼られている。許斐に気づいた常田は、考え事をしていたことを隠すかのように、会議のために机を並べ始める。

許斐　おはようございます。
常田　おはよう。
許斐　（急いで手伝おうとして、その辺に鞄を置き）俺やりますよ？
常田　何言ってんだよ、一緒にやればいいじゃない。
許斐　俺やりますよ。

許斐と常田は机と椅子を運びながら、

許斐　出席者何人でしたっけ？
常田　俺と許斐さん、重山さんと関口さん、そして鴨橋先生。五人だね。
許斐　（残りの机と椅子を数えながら）五人と。
常田　ごめんな。早めに呼び出して。
許斐　何かお話が？
常田　今日の会議、どう話を持っていくか、許斐と相談したくてさ。
許斐　、、、はい。
常田　ニュース見てる？
許斐　もちろん。
常田　（溜息）俺は毎朝、ニュースから目が離せなくなっちゃってさ。朝、テレビなんかつけなかったのに。
許斐　俺も朝起きたらまずテレビつけて、ニュース番組探しちゃいますね。
常田　紛争じゃないぜ？　大規模戦争だぜ？
許斐　、、、
常田　まあ、小さきゃ在っていいってわけじゃないんだけどね。
許斐　グラゴニア、ほんとに核持ってるんですかね？
常田　人口五百万弱の小国って話だからな、ブラフだと思うけど、、、怖いよな。
許斐　社長、ＳＮＳはやってますか？

常田　（首を横に振り）ううん。
許斐　ＳＮＳで見ると、テレビよりもえぐいですよ。

戦車が進む音。それに続く、ミサイルの発射音、着弾音。

許斐　侵攻する戦車に乗ってミサイルを打つ兵士たち。奴らはスマホで戦争を実況中継。
　それを見てグラゴニアを叩く世界中のネット民。
常田　完全に悪者か。
許斐　しょうがないですよ。この時代に軍事侵攻って何考えてんだ。
常田　、、、

許斐、いくつかの机と椅子を並べ終えて、

許斐　（窓の外を見て）受験生も落ち着かないだろうな。こんな状況の中で、将来を決める試験を受けなきゃいけないんだから。
常田　許斐さんってギャンブルする？

間。

許斐　どういう意味ですか？
常田　賭け事とかするかって意味だよ。
許斐　（真意を測りかねて）学生時代に麻雀は好きでよくやってましたけど、社会人になってから特には。
常田　そっか。
許斐　どうしてですか？
常田　受験生の中にもさ、選択問題で鉛筆転がして決めて、合格する奴もいるんだろうなあって思って。
許斐　そんなに甘くないですよ、受験。
常田　そう？
許斐　そりゃそうですよ。結局地道にやってる奴が勝つんです。
常田　そうか。
許斐　どうしたんですか？ 急にギャンブルって。
常田　いやね、この状況で『グラ日・日グラ辞典』を出したらどうなるかなあって思って。
許斐　はい？
常田　経営ってさあ、ギャンブルみたいなとこあるんだよね。

間。

許斐　何考えてんですか？

常田　売れるとは思うんだよ。だって話題にはなるだろうからさ。
許斐　売れるからなんなんですか？　話題になるからなんなんですか？
常田　そんな怒った目すんなよ。相談しにくいこと相談したくて、みんなより先に来てもらったんだから。
許斐　さっき怖いって言ってたの、何なんですか？　戦争が怖い、核戦争が怖い、そういう意味だと思ったんですけど。
常田　怖いよ、市民としては。でも経営者としてはさ、、ピンチがチャンスなら張らなきゃダメだろ？
許斐　、、、
常田　もちろん、よく見極めた上でだよ。
許斐　戦争使って金儲けしたいってことですか？
常田　それ、物事単純化しすぎじゃない？　我々がグラゴニア語辞書の企画を準備してたのは、こんな事態が起こる、だいぶ前からなんだぜ？
許斐　ネットじゃグラゴニアへの誹謗中傷の嵐ですよ？　なんだあの国は？　あの独裁者を止めろって。今、『グラ日・日グラ辞典』なんか出版したら、我々まで悪者にされますよ。
常田　悪者？
許斐　どこの駅でしたっけ？　グラゴニア語の案内表記を消せってクレームが入ったの。あんな文字見たくもないって。グラゴニアの大使館がある駅。
常田　そういうやり過ぎはよくないよな？
許斐　でも気持ちはわかる。
常田　、、、
許斐　だって、どうやって戦争を始めた国への怒りを表せばいいんですか？
常田　怖いな。普通の市民。
許斐　『グラ日・日グラ辞典』は、そのあんな文字が詰まった本なんですよ？　受け入れられるはずがない。
常田　当たりそうな宝くじだと思ったんだけどなあ。
許斐　宝くじ？
常田　『グラ日・日グラ辞典』を出して、その勢いで、カレーラ・ヨゼヨゼの小説をうちが一手に引き受けて、、、数年以内にヨゼヨゼがノーベル文学賞を獲る。うちはノーベル文学賞受賞作家を、誰よりも先に見出した出版社となる。
許斐　重山さんが全く同じこと言ってましたね。
常田　そうなんだよ。これは出版人生が終わりかけている老人たちの、最後の夢なの。
許斐　なら、その夢に殉じたらいいじゃないですか。
常田　そうもいかないだろ？　会社を本当に潰してしまって、社員たちを路頭に迷わせるわけにはいかないし。よく見極めたいんだよ。
許斐　（呆れて、苦笑い）ははは。
常田　これは保身じゃないぞ。俺は『グラ日・日グラ辞典』出して、万が一失敗しても、ギリギリ逃げ切れる年齢なんだから。むしろ君たちのために、最善の選択肢を取りたいんだよ。

許斐　じゃあ、リスクは負わないでいただきたいです。
常田　大勝ちする可能性があっても？
許斐　社長！今、うちみたいな小さな出版社がやるべきことは、ギャンブルすることじゃない。売れる商品をきちんと売り切ることです。

許斐、会議室の壁際に積まれていた『受験ガイド』の一冊を手に取り、常田の前に差し出す。

許斐　『受験ガイド』を待ってくれている人に届けましょうよ。
常田　そうだな。悪かった、ごめん。
許斐　あきらめていただけますか？　最後の夢。
常田　俺はいいんだけどさ、、重山さんがな。あの人、走り出しちゃうと止まらないところあるから。
許斐　説得しますよ。俺だって止まらないですから。
常田　そうだ。もう一つ相談したいことがあってさ、
許斐　何ですか？
常田　この会議室、、
蘭々　おはようございます。

と言って、蘭々がノロノロと入って来るが、常田の姿が目に入るやいなや、背筋を伸ばす。

常田　関口さん、おはよう。早いね。
許斐　おはよう。
蘭々　（急にきびきびとして）社長も早いすね。
常田　関口さんだって早いじゃない？　いつもギリギリなのに。
許斐　俺が注意したんですよ、時間ギリギリに来るんじゃなくて、ちょっと早めに来て、準備とかしとくもんだぞって。
常田　あ、そうなんだ。許斐さん、ちょっとコーヒー買いに行かないか。
蘭々　え？　私、行きますよ？
常田　いやいやいや、今の時代、若い社員にそんなことさせられないよ。こういうのは上の者が率先してやらないとね。（許斐に）行こう。
許斐　え？　あ、はい。

常田と許斐、出て行く。

蘭々　他に準備しとくことあります？
常田の声　鴨橋先生がわかるように、入口に紙貼っておいて。この会議室わかりにくいから。

蘭々　はーい。（去るのを見届けて）仲良いな、あの二人。（紙がありそうなところを探し）ええと、紙、紙。

蘭々、鞄からＡ４の紙と太いサインペンを出して、「月銭社『グラ日・日グラ辞典』会議」と書く。そこへ、暗い顔をした鴨橋、スマホで会議室までの地図を見ながら、入って来る。

鴨橋　おはようございます。

蘭々　あ、鴨橋先生、おはようございます。わかりました？　ここ。

鴨橋　、、

蘭々　どうしたんすか？

鴨橋　ここでいいんですよね？　なんか、迷ってしまって。

蘭々　はい、ここで大丈夫っす。社長と許斐は今、コーヒーを買いに行ってます。重山さんも、もう来ると思いますよ。

鴨橋　どこに座れば、、

蘭々　適当に、どこでも。

鴨橋　重山さんの隣りでもいいでしょうか。

蘭々　はい、もちろん。

鴨橋　では、私はここで、重山さんがそこで、関口さん、ここでいいですか？

蘭々　ちょっと待ってください。それだと私、司会席になっちゃう。

鴨橋　ダメですか？

蘭々　センターは社長が座ると思いますんで。私、ここ、先生の真向かいに座りますよ。

鴨橋　、、はい。

鴨橋、座る直前に、机に置かれた『受験ガイド』が目に入り、気分がさらに重くなる。

蘭々　どうしたんすか？　なんか怯えてるみたいですけど、、

鴨橋　もう会社の方針は決まってるんでしょうか？　私は社外の人間ですし、もう結論は出てて、それを承諾させられるだけなんじゃ。

蘭々　私はまだ何も聞いてないっす。

鴨橋　本当ですか？

蘭々　はい。会社もこんな緊急事態、滅多にあることじゃないから、そんなに簡単に方針決められないと思います。契約だって交わした後なんすから。会議でみんなで話し合って決めていけばいいんじゃないかな。

鴨橋　、、

蘭々　何かあったんすか？

鴨橋　町の人たちが怖くて。

蘭々　え？

音楽とともに、鴨橋の不安が増幅していき、頭の中で、小人の文字が死んでいく。
周囲の家具から黒い影が伸びていく。

鴨橋　電車の中で乗客のほとんどが、胸に黄色と黒のリボンをつけてました。相手国の国旗の色のリボン。まるで、これは正義の旗だみたいな感じで。

蘭々　私も。

鴨橋　え？

蘭々、ポケットから、黄色と黒のリボンを取り出して、

蘭々　母から渡されました。つけなかったんすけど。

鴨橋　、、、

蘭々　（明るく）でもしょうがないっすよ。こういう時って、みんな、自分なりの何かを、すぐにでもしたいって思っちゃうんすよ。うちの母も傷ついて混乱して、あまり考えも無しに。

鴨橋　怖いんです。日本のメディアも市民も、こぞってグラゴニアの侵攻を批判してるけど、我々だって今、集団ヒステリーを起こしてる！　なのにそのことに自分たちは気づいてない。

蘭々　私も怖いと思いましたよ。だからつけませんでした。ははは。

鴨橋　関口さんはどっちの味方ですか？

蘭々　そんな、どっちって、、、

鴨橋　担当し続けてくれますか？

蘭々　、、、

鴨橋　私、仲間が欲しいんです。

蘭々　重山さんがいるじゃないっすか。

鴨橋　重山さんだけじゃ不安なんです。

蘭々　先生、一旦落ち着きましょ。

蘭々、鴨橋を椅子に座らせる。

蘭々　先生のところには情報がいっぱい来てるんすか？

鴨橋　情報？

蘭々　グラゴニアの情報。グラゴニア語で検索できるなら、私たちよりも知ってる情報多いのかなって思って。それで少し不安になっちゃったのかなあって思って。

鴨橋　私、混乱してますか？

蘭々　はい。してると思います。

鴨橋　この五日間ずっと引き篭ってて。私が知っているグラゴニアは、陽気で開けっぴろげな人たちの国なんです。でも今は軍の命令によって笑顔も笑い声も押し殺されてる。

（やや間があり）戦況は追ってると、前線が一日毎に数メートルだけ北へ南へ。その数メートルの土地のために毎日、人が命を失ってる。

蘭々　カレーラ・ヨゼヨゼとメールのやりとりはしてます？

鴨橋　侵攻が始まってから、カレーラと音信不通で。でもどうして？

蘭々　気になることがあるんすよ。フェイクニュースかもしれないけど、私、カレーラ・ヨゼヨゼが、グラゴニアの軍事政権に殺されたって記事を読んだんです。

鴨橋　え？　何語の記事？

蘭々　英語です。私、グラゴニア語読めないから。だからデマかもしれないし。

鴨橋　、、、全然知らなかった。

蘭々　確かめたいっすよね。カレーラ・ヨゼヨゼが生きてるかどうか。

鴨橋　（取り乱して）きっと殺されたんだ。

蘭々　え？　先生？

鴨橋　私、もう耐えられない。

蘭々　先生、大丈夫ですから、落ち着きましょっ。

鴨橋　（突然、怒りが込み上げて）何が大丈夫なんですか？

蘭々　ええっ？

鴨橋　私は人生のほとんどを、グラゴニアと日本の架け橋になることに費やしてきたんです。なのにそのグラゴニアが今、、、今、、、隣の国の市民を、、、

蘭々、この雰囲気に耐えられず、その場から逃げようとする。しかし、思いとどまって引き返し、

蘭々　私、世界とか歴史とか政治とか、よくわかんないっすけど、、、グラゴニア人全員がやばいわけじゃないんでしょ？

鴨橋、顔を上げ、蘭々を見る。

蘭々　グラゴニア語がやばいわけでもないっすよね？

鴨橋　、、、

蘭々　先生がそれ信じられなくなったら、やばいっすよ。

鴨橋　、、、（蘭々の「やばい」に救われた気がして）ごめんなさい。

客席に、グラゴニアの民族衣装を着た重山が登場し、客席の間を走って通り、去っていく。同時に、蘭々のスマホの通知音がピロリンと鳴り出す。

蘭々　なんだ？

蘭々のスマホの通知音がピロリンピロリンと次々に鳴り出す。

蘭々　なんだ？　なんだ？

蘭々、自分のスマホを確認する。

蘭々　げっ！

鴨橋　どうしました？

蘭々　重山さんがＳＮＳで炎上してる！

鴨橋　え？　どういうことですか？

鴨橋が、蘭々のスマホを覗こうとするが、蘭々は鴨橋から距離を取る。

蘭々　見ないほうがいいっす。

鴨橋　見せてください。

蘭々　ダメっす。

誰かが走って会議室に近づいてくる足音。

重山の声　おはよ、ハア、ハア、うございます、ハア、ハア。

グラゴニアの民族衣装を着た重山朝子が、息を切らして、入って来る。

鴨橋　（驚いて）重山さん？！

重山　ハア、ハア、ハア、ハア。

蘭々　また息切らして入ってきた。とにかく座ってください。

重山　ありがとう。

重山、鴨橋の近くに座る。

鴨橋　何を考えてらっしゃるんですか？　こんな状況の中で、グラゴニアの民族衣装なんて。

重山　私、形から入るタイプなんです。

鴨橋　はい？　おっしゃってる意味が、、、

重山　関口さん、あなたの分もあるから、着て。

蘭々　重山さん、私が言うのもなんすけど馬鹿ですか？

重山　私なりに必死で、身体で考えたのよ。

蘭々　身体で？

重山　（鴨橋に）ゴールデンウィークにグラゴニアに行こうと思ってたんです。それで、いろいろと調べてるうちに、民族衣装自分でも着てみたくなって、大晦日にポチッとこれ衝動買いしまして。

鴨橋　だからって、この状況で、その服来て、電車に乗ってきたんすか？

重山　何日か前から、黄色と黒のリボンを胸にするのが流行り始めたのは知ってました。それにどうしても対抗したかったんです。でも、グラゴニアの国旗の色のリボンつけて対抗するのは、対立を煽るだけな気がして、、民族衣装なら、グラゴニアの民族衣装は、周囲の文化に影響されながら、こういう形になったんですよね？

鴨橋　、、はい。

重山　これを着ることが、あの地域の融和のメッセージになればと思って。

蘭々　季節外れのハロウィンか、コミケに行く人にしか見えませんって。

重山　私は決めたの。残りの人生でグラゴニア語の翻訳者になるんだって。そんなこと決断するには、馬鹿じゃなきゃできないのよ。（鴨橋に）鴨橋先生の分もありますから。

鴨橋　私の分も？

重山　柄違いも着たくて、三着買ったんです。

重山、鞄から二人分のグラゴニアの民族衣装を取り出す。

重山　どうぞ。

鴨橋、重山から民族衣装を手渡され、受け取る。

重山　はい、関口さんの分。

蘭々、重山から民族衣装を手渡され、片手で受け取る。

蘭々　、、、あざーす。

鴨橋　私、これ着れません。

重山　え？

鴨橋　重山さんがグラゴニアを愛してくれているのは本当に嬉しいですけど。でも、今、グラゴニアの侵攻によって、たくさんの人が殺されている。そんな状況でこれを着ていいのかどうか。

蘭々　（重山に）そりゃそうですって。先走ってるっていうか、ズレてますって。

重山　グラゴニアを、見えない国にしたくないと思っただけなのよ。

蘭々　、、、

重山　今は、軍服を着た兵士のグラゴニア人しか、ニュースには映らない。でも、グラゴニアという国は、こんな素敵な民族衣装を持っている国で、本当だったら、平和を愛する人たちで、それを見えるようにしたくて。

重山、鞄から二百枚ほどのＡ４の紙を取り出して、

重山　これ、リストアップしてきたので読んでいただけますか？

鴨橋　なんですか、これ？

鴨橋、百枚ほどを重山に渡す。

重山　「見出し語」のリストです。

鴨橋　「見出し語」？

重山、もう百枚ほどを蘭々に渡す。

重山　はい。私たちの『グラ日・日グラ辞典』に載せる、「見出し語」のリストです。使用頻度の高い基本の二千語は既に選んでありますから、それ以外からあと四千語、どの言葉を選ぶか一緒に考えたいんです。

鴨橋　収録する単語は、ほぼ決定してませんでしたっけ？

重山　こんな事態が起こってしまっては、選び直したほうがいいと思いまして。

鴨橋　それは、どういう（意図で）、、？

重山　使用頻度は高くなくても、グラゴニアを好きになってもらえるような言葉を入れたいんです。例えば、「ムルケアス」。

蘭々　どういう意味なんすか？

鴨橋　「老木の香り」。

重山　直訳するとそうなんだけど、もう一つ、意味がありますよね？

鴨橋　「老人が生きた時間」。

重山　木はね、若木（わかぎ）から大木（たいぼく）に成長していく中で、大地の記憶を吸って、それを香りに変えて、この世界に放つ。老木の香りには、その木が生きてきた、あらゆる時代の匂いが詰まっている。古代のグラゴニア人はそういう風に考えた。グラゴニア語ってね、匂いとか香りに様々な意味を込めた言葉が、世界で一番多い言語なんだって。

蘭々　企画会議でも言ってましたね。

重山　なんでかわからないけど、牛の臭いと豚の臭いを、違う単語で表すの。木の匂いも、草の匂いも、花の匂いも全部違う単語だって。薔薇なんかさ、薔薇の匂いを表す個別の単語があるの。

蘭々・鴨橋　、、、

重山　私、そういうの面白いなあって思ってさ。へえ、そんな言語があるんだって驚いたから。だから私、この辞書出したくて。

蘭々、原稿の一部を読み上げて、

蘭々　「この辞書は、幸か不幸か、グラゴニアという言葉が特別な意味を」

常田の声　戻りました。

許斐と常田が戻ってくる。

蘭々　あ、雅さん、、

許斐、蘭々が読んでいた原稿を取り上げ、声に出して読む。

許斐　「この辞書は、幸か不幸か、グラゴニアという言葉が特別な意味を持ってしまった年に生まれました。」なるほど。

重山　許斐君。おはよう。

許斐　皆さん、おはようございます。

鴨橋・蘭々　おはようございます。

重山　社長、おはようございます。

常田　おはよう。（鴨橋に）おはようございます。ええと、それは？

蘭々　重山さん、「まえがき」の原稿が混ざってましたよ。

蘭々、許斐が持っている原稿を取り返して、重山に返そうとするが、

重山　「まえがき」も、書き直したほうがいいと思いまして。それで行けるか、読んでいただけませんか？

許斐　出版そのものが行っていいのか、先に話し合いたいですね。

許斐と重山、睨み合う。

許斐　重山さん、聞いてもいいですか？　何ですか、その恰好は？

重山　グラゴニアの民族衣装。見たことある人、少ないと思って着て来たの。

常田　似合ってますよ。

重山　ありがとうございます。

許斐　まさか、それを着て、通勤してきたわけじゃないですよね？

重山　通勤してきました。

許斐　（腹が立って）何考えてんですか、あんた。

常田　そうそう、許斐君とコーヒー買ってきたんです。なんか、温かいもの飲みたくて。いい匂い嗅いだら、生きてるんだって気になるし。これ飲みながら会議を始めましょう。はい、鴨橋先生。はい、重山さん。

常田が鴨橋と重山にコーヒーを渡していく。許斐は、蘭々にコーヒーを渡す。

常田　そういえば、グラゴニア語って匂いとか香りを表す言葉が、世界で一番多い言語なんですよね？　コーヒーの匂いも、一言で表す単語、あったりするんですか？

重山　ありますよ。ね、先生？

鴨橋　はい。ただのコーヒーの匂いっていうニュアンスなら、「オヨフコプカス」でも、もっといい香りだっていうニュアンスを込めたければ、「アヌコプカス」って言葉もあって。直訳すると、「コーヒーの思い出」っていう意味なんですけど。匂いも、いろんなニュアンスで使い分けるのが、グラゴニア語の特徴で、、、

許斐　（遮って）じゃあ爆弾の臭いもそれぞれ単語があるんですか？　手榴弾とミサイル、きっと臭いは違いますもんね？

蘭々　雅さん！

許斐　（鴨橋と重山を見て）お二人には申し訳ないですが、この時期に「グラゴニア」関連の出版物を出すのはやめたほうがいい。

重山　なぜですか？

許斐　重山さんはここに来るまでに、胸に黄色と黒のリボンしてる人たちを見なかったんですか？　この状況でグラゴニアの辞書を出したら、我が社はグラゴニアを応援してるって勘違いされますよ？

重山　やりましょ。

許斐　はい？

重山　私はグラゴニアを応援したいと思っているんです。

許斐　あんた一人でやれよ！

蘭々　雅さん！

許斐　って思っちゃいますね。

重山　グラゴニアは我が国の「敵」なんですか？

許斐　いやいや、世界の「敵」じゃないですか？

重山　（常田や蘭々に）私たちグラゴニアについて何か知ってるんですか？　（許斐に）まだ何も知らないじゃないですか？

許斐　侵攻したのは知ってます。隣の国を攻めてますよね？

重山　でもどういう事情があったかは、、、

許斐　事情があれば、人を殺し、戦争を始めていいんですか？

常田　（許斐に）そんなけんか腰で議論を始めたら、まとまるものもまとまらないよ。

許斐　すみません。

常田　（皆に）落ち着いて話しましょう。今日お集まりいただいたのは、我が社で制作中の『グラ日・日グラ辞典』の出版の一時中止の件で、

鴨橋　中止？

常田　監修の鴨橋先生も交えて、会議を持ちたいと思ったからです。

鴨橋　中止にするんですか？

常田　五日前、グラゴニア共和国は隣国に対して、突然戦争を仕掛けました。このような非常事態にあって、私は当初の予定通り、グラゴニア語の辞書の編集作業を続けていくのは、難しいと思っています。

重山　今から出版を中止するというのは、有り得ないと思うんです。我が社は既に鴨橋先生と契約を交わしていますし、

許斐　こんな非常事態になってるのに、契約を持ち出すんですか？

重山　先生にしていただいている作業も、既に膨大になってるんです。今さら中止にするのは、、、

常田　鴨橋先生はどうお考えですか？

鴨橋　私は、、、

鴨橋、手に持っていたグラゴニアの民族衣装を握り締める。そして、丁寧に畳んで、机の上に置く。

鴨橋　私は、軍服姿じゃないグラゴニア人を、グラゴニアの姿を知っている人間です。事態がこうなったからこそ、引き下がっちゃいけないと思っています。

許斐　そういうとってつけたような「正義」いらないですよ。

鴨橋　出版を中止するのは、一番簡単な選択肢です。この非常事態を、外側から見る立場のままでいられる。逆に言えば、当初の予定通り出版するのは勇気が要ります。世間と反対の流れを進んでいかなければならないし、、当事者になることになりますから。

許斐　あなたはうちを潰す気ですか？

鴨橋　長い目で見たらきっとプラスになるはずです。今、世の中は、グラゴニアに対してヒステリックになっています。でもそれが収まれば、あの時にあの会社は、勇気を持ってグラゴニア語の辞書を出したんだって、きっとみんなが認めてくれるんではないでしょうか。

許斐　その前に潰れるよ。ネットで叩かれて、他の商品まで売れなくなるんだ。

重山、鞄から原稿の束を取り出して、

重山　これ読んで。

許斐　なんですか、それは。

重山　今、鴨橋先生が訳してる『砂の薔薇』の第一章の原稿。カレーラ・ヨゼヨゼの。『グラ日・日グラ辞典』の後に、これを出そうってことになってるやつ。

許斐　いらないですよ。

重山　凄いのよ。

許斐　凄かったらなんなんですか？

重山　売れるでしょ？　売れるなら意味あるでしょ？

許斐　この状況でグラゴニアの小説が売れると本気で思ってるんですか？

重山　ちょっとだけでも読んでみてよ。そしたらあなたにもわかるから。

許斐　うちは大手じゃないんだ。

重山　凄い小説なのよ。

許斐　広告費だって潤沢にあるわけじゃないし、埋もれて終わっちゃいますって。

重山　読めばわかるから。

許斐　（怒鳴って）読まなくてもわかる！

重山　、、、

許斐　すみません、怒鳴って。でも重山さん、四十年近くこの業界にいるわけですよね？凄い小説が売れるとは限らないことよくわかってるでしょ？　しかもマイナー言語の小説なんて。もう卒業しましょうよ、外国文学への憧れ。

重山　はい？

許斐　大手の出版社には就職できず、でも外国文学への憧れは捨てられず、定年前に会社を使って夢を叶えようとしないでほしいんです。我が社の主力商品は『受験ガイド』なんで。

重山　じゃあうちの部署はなんであるの？

許斐　重山さんや社長の若い頃は、外国文学を扱えば、会社をブランディングすることができたかもしれない。でも世界文学の全集が売れた時代は、もうとっくに終わってるんですよ。今も外国文学を追っかけてるのは一部のインテリだけ。大衆は見向きもしなくなった。

重山　、、、

許斐　これは今日言うつもりはなかったですけど、俺はこれを機に外国語関係の出版から撤退してもいいと思ってます。不採算部門じゃないですか。

重山　うちの部署が会社のボーナスを減らしてるって？

許斐　（独り言のように）ボーナスが減るだけならまだいいですけど、会社自体が潰れる可能性だってありますよ。

やや間があり、

許斐　知ってます？　この会議室使えるの、来月までだって。

重山　え？

常田　許斐さん、今言うなって。

許斐　経費削減です。社長の判断でこのフロアを借りるのやめるんですよ。四月からは会議する時は、、、倉庫でって。倉庫の空いてるスペースに机と椅子出してやろうって。これでもその辞書にこだわります？　ま、重山さんは来年定年だし、自分だけが有終の美を飾れればいいのか。

重山　、、、

許斐　今、やるべきことは、リスクを負って新しいことを始めることじゃない。いつもやっていることを変わらずやることなんです。こんな非常事態の時だからこそ！

許斐、窓の外を見つめながら、

許斐　あの震災の時だってそうだった。あの時も、四月に向けて、次の春に向けて、ラストスパートをかけていた時期だった。動揺しながらも我々は、待っている学生たちのために、新年度版の受験ガイドを必死こいて作ったじゃないですか。重山さんも社長も覚えてるでしょ？

常田　、、、

重山　覚えてるわ。

許斐　いつもと変わらない景色があるってことが大事なんです。（机の上の受験ガイドを見つめ）『受験ガイド』は、地味な出版物かもしれないけど、

重山　私はうちの本を誇れない。

許斐　はい？

重山　受験戦争を子どもたちに強いてる。

許斐　呆れた。自分たちの「本」を否定するんですか？

重山　子どもたちに受験以外の価値があると伝えるのも、我が社の使命なんじゃ。

許斐　『受験ガイド』は、子どもや保護者が進路を丁寧に選べるように工夫を凝らしてる。

重山　でも結局は偏差値重視で、受験産業に飲み込まれてるじゃない。

許斐　そんなことない。

重山　なら偏差値載せるのやめようよ。

許斐　重山さん、言ってること滅茶苦茶ですって。偏差値は目安なんです。わかりやすい基準なんです。基準の数字を無くしたら、判断の足掛かりがなくなってしまう。

重山　でもその数字に囚われて大事なものを見失ってるとしたら、、

許斐　（遮って）親の気持ちになって考えてみてくださいよ。

重山　え？

許斐　、、すみません。

重山　私も親の気持ちになって考えています。

許斐　でも想像できないこともありますよね？　親がどういう思いで受験ガイドのページをめくるのか？

重山　、、、

許斐　我が子の偏差値、志望校の教育方針、学費。与えられた条件の中で、我が子にベストな学校を選ばせたい。そんな保護者の気持ちに寄り添って、うちは『受験ガイド』を出版してるんじゃないんですか？　なんの志も持たず、ただただ受験産業の濁流に飲み込まれている、それだけの本だって？

重山　そうは言ってないでしょ？

許斐　言ってるようなもんでしょ？

蘭々　雅さんの娘さん、来年受験ですもんね？

許斐　それが何だよ？

蘭々　娘さんに自分の仕事の成果、手渡したいのはわかりますけど、

許斐　んだと？

蘭々　力を入れすぎるのはよくないっすよ。『受験ガイド』たくさん売ったって、娘さんと一緒に暮らせるってことには繋がらないっすよ。また

許斐　なんでそんなことお前に言われなきゃなんないんだ？

蘭々　雅さんが先に重山さんのプライベートに踏み込んだからですよ！

常田　やめろって。

間。

常田　関口さん、君は許斐さんのプライベートなことを知ってるようだけど、そこに入り込むのもルール違反なんじゃないか？

蘭々　すみません、ちょっと踏み込み過ぎまして。

常田　許斐さんも重山さんに言い過ぎたんじゃないかな？

許斐　重山さん、すみませんでした。

重山　私は大丈夫です。

間。

許斐　お前はいいのか？　一人で仕事任されるようになったのに、会社自体が潰れるかもしれないんだぞ？

蘭々　これ、うちみたいな小さな出版社だからこそ、できることなのかもしれないっすよ。

許斐　はい？

蘭々　私も、、、グラゴニアを見えない国にしたくない。

許斐　見えない国？

蘭々　見えないじゃないですか？　グラゴニア人が何を考えているのか？　辞書が無ければ見えない。翻訳する人がいなければ見えない。（原稿を握り締めて）この辞書を作ることは、見えない国を、この国の人たちに見えるようにすることなんじゃ、、、

許斐　（遮って）見えなくていい。

蘭々　え？

許斐　グラゴニアこそ隣の国を飲み込んで、見えない国にしようとしてるんですよ。そんな国を丁寧に見る必要あるのかな？

鴨橋　私の祖母は英語が大好きな人でした。私は祖母の影響で外国語に興味を持つようになったんです。祖母は生前よく言ってました。「今の人には信じられないかもしれんじょ、戦時中は、英語は決して学んじょならない「敵性言語」やったんじょ」って。

蘭々　え？

重山　それ、どちらの方言ですか？

鴨橋　うちの島の方言です。「でも日本が戦争に負けたら、やっちゃいけないはじゅの英語の授業が急に宣伝されるようになったんじょ」って。今、世間が真実だと思ってることは、状況が変わればあっという間にひっくり返ります。

許斐　グラゴニアは核を持ってるんですよ？　もし核を撃ったらどうするんですか？

重山　核を持ってるのはグラゴニアだけ？　アメリカだってイギリスだってフランスだって、大国はみんな持ってるくせに、小国が持っている時だけ弱い者いじめするんですか？

許斐　グラゴニアを信じろって言うんですか？

重山　、、、

鴨橋　辞書が無いからだとしたら？

許斐　え？

鴨橋　辞書が無くて、見えない国だからだとしたら？ アメリカもイギリスもフランスも、みんな核を持っているのに、そこまで問題視されないのは、この国に英語やフランス語のいい辞書があって、言葉を通じてみんながどんな国か知ることができるからだとしたら？

間。

常田　わかりました。『グラ日・日グラ辞典』を予定どおり出版しましょう。

許斐　社長？！

鴨橋　ありがとうございます。

常田　ただし条件があります。カレーラ・ヨゼヨゼが生きているか、調べてもらえませんか？ 真偽ははっきりわからないのですが、英語でカレーラ・ヨゼヨゼが軍事政権に殺されたというニュースが出回ってる。

蘭々　そのニュース、私も見ました。

常田　彼の生存を確認したいんです。

重山　ノーベル文学賞は、死者には贈られないからですか？

常田　そうです。『グラ日・日グラ辞典』を出して、その勢いでカレーラ・ヨゼヨゼの小説をうちで一手に引き受けて、数年以内にヨゼヨゼがノーベル文学賞を獲る。うちはノーベル文学賞受賞作家を誰よりも先に見出した出版社となる。重山さんは、そう言って私を説得したんですから、（重山に）ね？

重山　はい。

常田　もちろん、それだけを目指して、出版の仕事をやってきたわけじゃないんですが。しかし会社が傾いている時に、クジの中に大当たりが無いとわかっていて手を出すわけには、、、

鴨橋　わかりました。今、調べてみます。

鴨橋、鞄からｉＰａｄを出して、検索する。

鴨橋　え？

重山　（鴨橋に近づいて）どうしたんですか？

鴨橋、ｉＰａｄの画面を隠す。

重山　読んでください。

鴨橋の周りに、全員が寄ってくる。鴨橋は、ｉＰａｄの画面のグラゴニア語で書かれたグラゴニアのサイトを見ながら、

鴨橋　カレーラ・ヨゼヨゼは殺されてない。

常田　ほー、よかった。
鴨橋　もっと悪い。
常田　え？
鴨橋　カレーラ・ヨゼヨゼは、軍事政権による、隣国への侵攻を支持すると、声明を出してます。

音楽が流れる。擬人化された砂の薔薇が、手錠で縛られたように両手を薔薇の蔓で縛られた状態のカレーラを、引っ張りながら現れる。常田、許斐、蘭々は退場し転換。カレーラの声と重なるように、帰宅途中の茫然自失した重山の姿が見え、しばらくして消える。

カレーラの声　「美しさが私を縛る。見えない薔薇の美しさが私を。どうやって伝えれば？花びらが幾重にも重なり合う、あの美しさを。踊るように円を描く花びらたちが、互いに互いを包み合う、あの美しさを。蜜蜂も青虫も虜にするあの香りを。見たことがないものの「美」を、ここの人たちの誰も、信じてくれないのだ。」

自分の部屋の机の前に座り、ｉＰａｄで『砂の薔薇』を読んでいる鴨橋の姿が見えてくる。カレーラも、自分の机の前に座る。パソコンのキーボードをタイプする音が聞こえてくる。

第５場　鴨橋の部屋・カレーラの部屋（回想）

第２場より三ヶ月ほど前。カレーラと鴨橋がチャットをしている。日本は深夜。グラゴニアは昼間。舞台上で三間ほどの距離を挟んで二人は向き合っている。自分の部屋のパソコンを通して、相手と繋がっている態。日本は深夜。グラゴニアは昼間。擬人化された砂の薔薇は、中央後方の大きな本棚に向かって、崩れ落ちた大量の本の上をゆっくりと歩いていく。

カレーラ　『砂の薔薇』を翻訳したい？
鴨橋　はい。東京の小さな出版社なんですが、グラゴニア語に興味を持ってくれた編集者がいるんです。一年ぐらい前に、偶然グラゴニア語と出会って、最近独学で勉強を始めたら、グラゴニア語を好きになっちゃったらしくて。あなたの作品の出版を、自分の会社の企画会議に上げてみたいと言ってくれて。
カレーラ　日本で出版するなら、もっとそれに相応しい小説がある。ちょっと待って。いくつか送るから。
鴨橋　私は『砂の薔薇』が好きなんです。十年前、あなたが思いついたばかりのあらすじを、語ってくれた時から。

擬人化された砂の薔薇は、本棚の前まで行くと、崩れ落ちた本の上に寝転び、静か

になる。

カレーラ　『砂の薔薇』はグラゴニアに伝わる古い伝説を基にした作品。あの作品の細部を、日本の読者が簡単に理解できるとは思わない。

鴨橋　あれは、見えないものを見ようとした女の、想像力を巡る寓話になっています。確かに日本の読者には難しく感じられるところもありますけど、普遍性があって誰もに受け入れられる物語だと思うんです。

カレーラ　誰もに受け入れられる？

鴨橋　英語のインタビューで答えてたじゃないですか。「私は、あの作品によって、世界の人々の記憶に残り、いつかノーベル文学賞を獲るだろう」って。私、あのインタビューを、その編集者に見せたんです。そしたら彼女、『砂の薔薇』を日本語で読んでみたいって。

カレーラ　あれは、、、ああでも言わなきゃ、欧米の批評家や研究者は、私の小説を読まない。それにこの世界に普遍性なんてものがあるなんて、私は信じたことはない。

鴨橋　、、、

カレーラ　カモハシ、あなたはあの物語に埋め込まれた影に気づいてないんだ。

鴨橋　影？

音楽が流れる。カレーラの影が大きくなり、その濃さを増したかのように、擬人化された砂の薔薇が立ち上がる。

カレーラ　あれは五百年前のグラゴニアに、外来の薔薇が、異教徒によってもたらされたことを描いた、文化の汚染を巡る寓話。

鴨橋　文化の汚染？ ちょっと待って、、、

カレーラ　（遮って）今、世界がアルファベットで覆われていくように、五百年前のグラゴニアにも外国の文化が入り込んでいった。

鴨橋　カレーラ、どうしたんですか？ チャットだからかな？ いつもよりあなたが使う言葉が強く感じる。

カレーラ　私はいつもと変わらない。

鴨橋　カレーラ、その国の文化は、周囲の国と相互に影響し合いながら育っていくものなんじゃ、、、グラゴニアの文字の歴史だって、まず隣りの大国からイジュナク文字をもらってきたんですよね？ そこからアナカタク文字とアナガ、、（リヒ文字を作って）

カレーラ　（遮って）グラゴニア人が、グラゴニア語で小説を書くということは、言葉で「グラゴニア」を発見するということだ！

鴨橋　カレーラ、今日は本当にどうかしたんですか？

カレーラ　私は、薔薇にまつわるこの国の歴史から、「グラゴニア」の悲しみを見つけてしまった。グラゴニアに匂いを表す言葉がたくさんあるのは、この国が古代から、匂いがするものを、近隣の大国のために生産し、輸出する国だったからだ。珈琲、カカオ、蜂蜜に留まらず、肥料のための、牛の糞、豚の糞、そして、色とりどりの豊潤な香りのす

る薔薇。

カレーラ、自らの顔を覆っていた布を剥ぎ取り、顔を見せる。

カレーラ　百年前までは近隣の大国のために、そして今は、グラゴニアがどこにあるかも知らない先進国の消費者たちのために、私たちは「匂い」を輸出する。雨の少ないこの国で、大量の水を使いながら、自分たちの喉の渇きに耐えながら、「香り」を育て、輸出している。

擬人化された砂の薔薇がカレーラに近づいてくる。

カレーラ　グラゴニアは小国だ。この国の作家には、「ここにグラゴニアがある」と、言葉で宣言していく使命がある！

鴨橋　その国の文学が、その国らしさに縛られていたら、世界中の文学は行き詰まり痩せ細ります。

カレーラ　いいや、グラゴニアらしさが確かにあると叫ばなければ、世界はこの国に振り向いてくれない！

鴨橋　そうやってマイナー言語の作家たちは、先進国の読者が喜びそうな文化を描（えが）こうとしてしまう。でもあなたの作品はそれだけじゃない。もっと自由で開かれている。だから私はあなたの作品を届けたいと思ったんです。

カレーラの身体に、擬人化された砂の薔薇がまとわりつき始める。

カレーラ　もうこの世界に純粋な「グラゴニアらしさ」はないのかもしれない。それでも私は言葉で、「グラゴニアらしさ」を見つけなければならないんだ！

鴨橋とカレーラの時間は現在に戻る。擬人化された砂の薔薇がカレーラを締め上げていく。

カレーラ　「女は体の内側で、今やつぼみを枯らした薔薇がゆっくりと、その枝を伸ばしていくのを感じた。灰色の枝が細（ほそ）く細（こま）かく自らの体を引き裂くようにして伸びていった。枝分かれする度に、薔薇から鈍い悲鳴が聞こえるかのようだった。」

カレーラと擬人化された砂の薔薇とは、本体と影が入れ替わったかのようになる。砂の薔薇は、カレーラの前に立ち、苦しみ始める。

カレーラ　「しかし、いつしか悲鳴は薔薇のではなく、女のものに変わっていた。灰色の枝が蔓になって、女の体中の血管を支えにしながら、絶え間なく伸び続け、その棘で女を内側から締め上げたからだ。」

カレーラ、退場。擬人化された砂の薔薇も、鴨橋の台詞に合わせて、退場。

鴨橋　影になら気づいていました。私がこの『砂の薔薇』を、何度読んだと思います？ 何度読み返したと思います？ 翻訳者は、作者よりもその作品を深くわかろうとする読者なんです。私は『砂の薔薇』を、日本人として読み、グラゴニア人になって読み、あなたになって読み、もう一度、私自身として読んで、、

音楽が流れて、鴨橋は退場し、転換。ランニングウェアにキャップ帽をかぶった許斐が現れる。

第６場　コーヒーショップ

第４場から一ヶ月後。許斐は河川敷を走っている。道端で植物が芽を出しているのに気づき、立ち止まる。許斐、その芽に触れ、すぐにその場から走り去る。すると、舞台に第２場とは別のコーヒーショップが現れる。関口蘭々がテーブル席に座って、『砂の薔薇』の翻訳原稿を読んでいる。突然、驚いた表情で後ろを振り返る。そこには、許斐が立っている。

蘭々　え？

許斐　走ってたら、そこの窓から見えて。

蘭々　ああ。

許斐　一人？

蘭々　（なんでもないという顔で頷いて）一人っす。あ！（窓の外を指で示して）

許斐　え？ 何？

許斐、周囲を見回す。蘭々、テーブルの上に置いて読んでいた翻訳原稿を、さっと隠す。

許斐　それ何？

蘭々　（咄嗟に）紙っす。

許斐　は？ 何の紙かって聞いてんだよ。

蘭々　雅さん、探偵っすか？

許斐　誰と待ち合わせ？

と言いながら、許斐、蘭々の目の前の席に座ろうとする。

蘭々　ちょちょちょ、私にもプライベートはあるんで。

許斐　仕事だろ？

蘭々　やめてくださいよ、休日に仕事なんかするはずないでしょ？　私ですよ？
許斐　お前変わったから。
蘭々　やだなぁ、変わってないですって。
許斐　鴨橋か？
蘭々　違います彼氏と会うんです。雅さんに絡まれてるの見られたら誤解されるから。はい、走りに戻って。
許斐　彼氏いないって言ってたじゃねえか。
蘭々　できたんですって。
許斐　そんなにすぐにできるか。
蘭々　あ、今の発言、セクハラ！　セクハラ！
許斐　お前許斐派だろ？

間。

蘭々　何その所有欲丸出しのダサい言い方。「お前許斐派だろ？」。
許斐　なんでだよ？
蘭々　許斐派やめただけですよ。目的は達成されましたよね？『グラ日・日グラ辞典』の出版は中止になった。だったらもう執着しなくていいんじゃないですか？

許斐、蘭々のテーブルから離れ、走り去る。店の外まで出て行く。しかし、店のドアの音がカランコロンと鳴って、許斐が駆け足で戻って来る。

蘭々　え？
許斐　自分の希望が叶ったのに心が晴れない。どうしてだ？
蘭々　だから走ってたんですか？
許斐　そうだよ、悪いか。
蘭々　もっと走れば？
許斐　（遮って）いくら走っても晴れない。どうしてだよ？
蘭々　他人（ひと）の大切なものを奪っても、自分の大切なものが帰ってくるわけじゃないから？
許斐　、、、

蘭々、先程隠した翻訳原稿を再び、取り出して、

蘭々　別に何しようってわけじゃないんですよ。鴨橋先生に『砂の薔薇』の翻訳を続けてもらおうと思って。
許斐　まさか、うちで出す気か？
蘭々　出せるわけないでしょ？
許斐　じゃあどうして？

蘭々、周りを気にして、

蘭々　もう座ってください。

許斐、蘭々の前の席に座る。

蘭々　読んでみたいと思ったから。編集者として。

許斐　出版できないのに翻訳だけさせてどうすんだよ？

蘭々　読んで感動してから考えます。感動しなかったら、申し訳ないですけどって言いますし。

許斐　そういうのはな、出版社の横暴って言うんだぞ？

蘭々　読まなきゃ始められないじゃないっすか。感動したら（鞄から自分の財布を取り出し、テーブルに置き）自腹切りますよ。出版できなかったとしてもボーナスで翻訳料払います。

許斐　うちのボーナスじゃ足りないだろうが。

蘭々　本当に感動したら、うちでできなくてもどこかで出版できるように、企画書を一緒に書いて持ち込んでもらいます。

許斐　、、、

蘭々　ただ本出して売るのが、出版社の仕事じゃないでしょ？ 出版社は、本と読者を出会わせるところまで持って行かなきゃ仕事をしたって言えないんじゃないかって思って。

許斐、その場を去ろうと立ち上がるが、蘭々も引き留めようとして立ち上がり、

蘭々　あ、あ、雅さんのこと全然否定してないっすからね。雅さんは、『受験ガイド』と読者が出会うところを想像しながら仕事をしてきた。そこは尊敬してますから。

許斐、蘭々に背中を向けて、もう一度座る。

蘭々　（許斐の顔を覗いて）私、書店員してたことあるんすよ、学生時代にバイトで。毎日入ってくる新刊を棚に並べるのが仕事。小さな本屋だったからスペースは限られてた。だから並べ方に工夫して、フェアをして、ＰＯＰを作って、とにかく売り切るのが目標。頑張ったなぁ。売れ筋じゃない本だって、お客さんとどう出会わせるか次第なんすよ。

許斐　、、、

蘭々　四年間お店にずーっと残ってる文芸書がついに売れたことがあって、この間、なんか思い出しちゃって、、、嬉しかったなぁって。

蘭々、突然、窓の外の誰かに気づいたようだ。

蘭々　あ、やばっ。鴨橋先生だ。雅さん、そっちに座ってください。
許斐　え？
蘭々　雅さんがここにいたら、気まずくなっちゃうでしょ？

蘭々、許斐を自分たちの席から離れた席に座らせる。許斐が座ったのを確認して、蘭々は鴨橋に手を振る。相手が気づかないので、立ち上がって、大きく手を振る。相手も蘭々に気づいたようだ。蘭々は、窓越しにコーヒーショップの入り口がグルッと回ったところだというジェスチャーをする。相手が理解したようなので、ニコッとして、座る。蘭々、鞄と一緒に置いてあった新聞を許斐に渡す。許斐、新聞を読んで、自分の顔を隠す。店のドアの音がカランコロンと鳴る音。鴨橋真由が入って来る。

蘭々　（鴨橋を見つけて）ああ、先生、こちらでございます。
鴨橋　はい。
蘭々　どうぞ、お掛けください。

鴨橋、蘭々が座っているテーブルに近づいてくる。

蘭々　休日に遠いところまでお呼びして、申し訳ございません。
鴨橋　いえ。いつものところだと、会社の方と会っちゃうかもしれないじゃないですか。（周囲を見回しながら）ここなら誰とも（鉢合わせしないだろうから、助かります。）
蘭々　（許斐を見つけてしまうのではとギクッとしながら）あ、先生！

と、蘭々、鴨橋に自分の方を向かせるよう呼びかけ、注意を向かせるために奇妙なステップを披露する。訝しげに蘭々を見る鴨橋。

蘭々　（椅子を示して）どうぞ。
鴨橋　ああ、ありがとうございます。

鴨橋、座る。それを見て蘭々も座る。

鴨橋　受験勉強してる子、多いですね。
蘭々　そうなんでございます。ここ近くに高校が三つもございますから、この時期は受験生でいっぱいなんでございます。うちの優良顧客の巣と申しますか、『受験ガイド』をテーブルに置いてる子もいるでございますでしょ？
鴨橋　あ、ほんとだ。
蘭々　雅さんに言われたことがあるんです。（許斐の真似をして）「お前、買ってくれた人がどんな顔して使ってるのか、忘れないようにしろよ」って。それで時々、ここに来るようにしてて。

許斐、鴨橋と蘭々の言葉に反応し、受験生たちの姿を見る。

鴨橋　辞書、持ち込んで勉強してる子も多いですね。持って来るの大変じゃないのかな？

蘭々　紙だとポストイットも貼れますし、記憶に残りやすいんでしょうね。あ、コーヒーを買って参りますね。（立ち上がる）

鴨橋　いえ、今日は自分で。

蘭々　大丈夫でございます。今日は変なの、購入して参りませんから。

蘭々、コーヒーを買いに行く。テーブルの上に置いてあった『砂の薔薇』の翻訳原稿が、鴨橋の目に入る。突然、頭上から戦闘機の通過音。窓の外を眺める鴨橋、窓に近づき、飛んでいく飛行機を見つめる。許斐も同じように飛行機を見つめる。蘭々が戻ってくる。

蘭々　すごい音でございますね。

鴨橋　戦闘機ですかね？

蘭々　え？　旅客機じゃないっすか？

鴨橋　でもすごく速いんですよ。あ、もう見えなくなった。

蘭々　先生、コーヒーどうぞ。

鴨橋　長い飛行機雲。どこかに帰る飛行機ですかね、あれ。

蘭々　、、、

鴨橋　それともどこかに向かってる？

蘭々　、、、

鴨橋　もしかして、グラゴニアに向かってる？

蘭々　やめましょう、先生。全部を戦争と繋げるの。

鴨橋　全部が戦争と繋がってるじゃないですか？

蘭々、鴨橋の表情に気圧されるが、勇気を出してそっと鴨橋の手を握る。蘭々、の手の温もりが伝わり、鴨橋は気持ちが落ち着く。二人、席に戻る。

蘭々　ヨゼヨゼから連絡はないんでございますか？

鴨橋　実は、グラゴニアが空爆される直前、短いメールが来たんですが、その後は連絡が途絶えちゃって。無事国外に脱出してるといいんですけど。

蘭々　、、、私、あの声明について考えたんでございますけどね。脅されて、無理やり言わされたってこともあるんじゃないでしょうか。

鴨橋　そう思いたいですけど、、、

蘭々　子どもを人質にとられたって可能性だってあると思うんですよ。

許斐は「子ども」の言葉に反応して、二人を見始める。

鴨橋　私もそう思いたいです。でも、

蘭々　でも？

鴨橋　もしそういうのじゃなくて、本当に独裁者に同調してしまったのだとしたら？ 今思い返すと、カレーラの作品には郷土愛が強すぎるところがあるような気がするんです。

蘭々　、、、

鴨橋　カレーラが心の底から独裁者を信じていたら。そんな作家の小説を翻訳していたのだとしたら？ 私、どうしたら、、

蘭々　どうもできないでございますよ。

鴨橋　え？

蘭々　先生は翻訳者でしょ？ 作者の母語を日本語にするのが仕事でしょ？ その作者がどんな人間であれ、そこに先生が読んで伝えるべきだと思う言葉があったら、翻訳して読んでもらうしかないじゃないですか。その作者の政治的な思想を読者がどう判断するかは、読者の仕事です。（鴨橋にしっかり身体を向けて）翻訳者と編集者はそこには関与できない。でもそこに言葉があるっていうのだけは、伝えられる。読んでみてっとだけは言える。

鴨橋　、、、そうですね。

蘭々　重山さんにも会いに行ってもらえませんか？

鴨橋　重山さん？

蘭々　実は重山さん、あの日以来会社に来てないんです。

鴨橋　あの日以来って、もう一ヶ月近く経ってますよ？

蘭々　はい、一ヶ月会社来てません。

鴨橋　そうですか。

蘭々　私が連絡しても電話に出てくれませんし、一度家に行ったんですが、居留守使われちゃって。でも鴨橋先生なら、ドア開けてくれるんじゃないかな。

鴨橋　、、、私、合わせる顔がないです。

蘭々　え？ どうして？

鴨橋　だってグラゴニア、無くなってしまったんですよ？

蘭々　それは先生のせいじゃないでしょ？

鴨橋　でも私がグラゴニア語の世界に重山さんを巻き込んだのに、そのグラゴニアは世界の敵になって、

突如、絨毯爆撃の音が、しばらくの間、三人の耳に木霊す。

鴨橋　もう国自体が消滅してしまったんですよ。どんな顔して会いに行けばいいんですか？

許斐が突然、立ち上がり、

許斐　（鴨橋に背中を向けたまま）一緒に薔薇が見たいって言えよ！

鴨橋　え？　許斐さん？

許斐　（振り向いて）見えない薔薇を一緒に見ようって言えよ！

蘭々　先生、すみません。私がここに座ってたら、ジョギング中の雅さんがここに入って来て、

許斐、ポケットから、ローズヒップを取り出し、

許斐　これ。

許斐、ローズヒップを鴨橋の前に置く。

許斐　薔薇の実。中に種が入ってる。さっきホームセンターで買った。

蘭々　さっき？

許斐　妻に出て行かれた時に言われたんだ。「あなたは物質的なものしか見えない人だ。ケイジジョウ（形而上）的な世界を理解できない人だ」って。

蘭々　はい？

許斐　俺はケイジジョウを理解できない男だ。

蘭々　何言ってるかわかんないっす。（鴨橋に）ねえ？

鴨橋　（戸惑って）ええ。

許斐　『砂の薔薇』は見えない薔薇を見ようとする話だろ？

鴨橋　はい。

許斐　俺は見えない国も見えない薔薇も見たくない。なのに走ってたらホームセンターが見えて、気づいたら薔薇の種を買ってた。俺はこれを育てたいのか？　妻には見えてる、見えない何か見るために？

蘭々　それ『砂の薔薇』のつもりっすか？

許斐　悪いか？

蘭々　読んでみたいなら鴨橋先生に頼めばいいでしょ？

許斐　今さら頼めない。

蘭々　今、先生の目の前で変なこと言ってるのに？

許斐　（叫んで）明日になれば元の俺に戻っちゃうんだよ！

許斐、走って出て行く。

蘭々　え？　雅さん？　ちょっとぉ！　（鴨橋に）先生、すみません。

鴨橋は、ローズヒップをじっと見ている。

蘭々　先生？

鴨橋　薔薇の種か。

音楽とともに、鴨橋は、テーブルの上に置いてあった『砂の薔薇』の翻訳原稿を手に取り、読み始める。

第７場　鴨橋の部屋

鴨橋　「誰もいなくなった。人だけではなく、あらゆる動物、そして虫さえもいなくなった。」

擬人化された砂の薔薇が、手錠で縛られたように両手を薔薇の蔓で縛られた状態のカレーラを、引っ張りながら現れる。入れ替わるように蘭々、退場。鴨橋は、何かに気づき、パソコンに向かう。

カレーラ　「蝶も蜘蛛も、蜜蜂もフンコロガシも、人が名前をつけたありとあらゆる虫たちが世界から消え、」

鴨橋、あらためて翻訳を直し始める。砂の薔薇は、カレーラから離れ、優しくその花を咲かす。それを後ろから眺めるカレーラ。

鴨橋　「薔薇の木だけがこの世界に残された。」

カレーラ　「誰にも嗅がれず、触れられることもなくなった薔薇には、匂いはもう必要ないものだった。」

重山が肩に毛布をかけて登場。入れ替わるように、カレーラと擬人化された砂の薔薇、退場。

鴨橋　「薔薇は匂いを捨てた。すると、体から色も消え失せた。まるで焼け焦げたように花も茎も根も漆黒に変わり、それでも薔薇は、美しく咲き続けた。」

鴨橋、退場。

第８場　重山の部屋

三月末。重山の一人暮らしの部屋。テーブルの上には、部屋中から剥がされたポストイットの山、化粧ポーチ、切手帳、マンガ本数冊、マグカップ等が置かれている。ソファーで毛布を頭にかぶり、やる気無さそうに寝転がっている重山。近所に住む不登校の高校生である美沙は、ずっと重山に喋っている。重山の散らかった部屋を片付けながら。

美沙　私だって、初めて見た時は、これどんなセンスだよ？って思ったんだよ。この人、美意識とかないんだろうかって。忙しすぎて見た目にこだわれなくなってる痛い人だぁって。だって、トイレの中にだって十枚以上貼ってあったでしょ？冷蔵庫開けたら食品全部に貼ってあったじゃん？あれを異様な光景って言わずに何て言うの？いくら一人暮らしって言ったって、部屋中にポストイット貼ってる人なんて見たことなかったもん。人、家に呼べないでしょ？あれじゃ。編集者ってこんなにポストイット好きなの？って。メモ好きなの？って。あ！もしかしたら、この人、ポストイット食べてんじゃん？これはこの人のおやつなんじゃん？そう思ったら、ポストイットがどんどん美味しそうに見えてきて、、、で、色によって味違うんだろうかとかも想像してたの。

美沙、テーブルの上にあった、使われていない大きめのポストイットを三枚ほど口に入れて、噛み始める。クシャクシャと音を立てながら、重山の傍まで来て座る。

重山　、、、

美沙　私がそんなこと考えてるって思いもしないで、重ちゃん、私に言ったんだよ。「ホットミルク飲む？」って。「温まるよ」って。それで冷蔵庫から牛乳パック取り出して、牛乳パックに貼ってあるポストイット剥がして、食器棚からマグカップ取り出して、ここにもポストイットが貼ってあったからそれも剥がして、それで牛乳を注いでくれて、レンジで温めてくれて。電子レンジにも、もちろんポストイットが貼ってあったんだけど、よく見たらそこには変な文字が書かれていたんだよね。電子レンジのポストイットにも、牛乳パックのポストイットにも、マグカップのポストイットにも。あれ、日本語じゃねえぞって。見たことのない外国語。小人が可愛いダンス踊っているような文字。

重山　、、、

美沙　ねえ、なんで全部取っちゃったの？

重山　、、、

美沙　私、まだ全然覚えてないんだよ。

重山　、、、

美沙　もう私に教えるのもしないの？

重山　、、、

美沙　人に教えるのも勉強になるって言ってたのに。

重山　、、、

美沙　この漫画、本棚にしまっちゃうよ。

重山　、、、

美沙、漫画を本棚にしまおうとして手に取ると、漫画の下にやや古めかしい切手帳があるのを見つける。

美沙　何これ？キッテチョウ？へえ、重ちゃん、切手集めてたんだ。読む漫画は最近の

だけど、やっぱり昭和の女だね。（重山のほうに来て）これ見てもいい？

重山　美沙ちゃん。

美沙　何？

重山　ここにいてもいいけど、少しそっとしておいてもらいたいの。

美沙　ごめん。

重山　、、、

美沙　ホットミルクは淹れてあげてもいい？　温まるから。

重山　、、、

重山、黙ってうなずく。美沙、切手帳をその辺りのテーブルに置き、台所へ。冷蔵庫から牛乳を出して、マグカップに電子レンジで温める。電子レンジが回り始めるジーという音。美沙、重山のところへ戻って来て、

美沙　行きたくない時は会社なんか行かなくていいと思うよ。会社だけが人生じゃないじゃん。会社に行かなくたって、人生についていかようにも学べると思う。図書館もあるし、インターネットもあるし。

チンという電子レンジが止まる音。美沙は電子レンジのほうへ行きかけるが、

美沙　（超小声で）近所に年の離れた親友さえいれば。

そういって、美沙はさっと電子レンジのほうへ向かう。重山、毛布を顔からはずし、美沙の後ろ姿を見るが、美沙がすぐに戻って来るので、慌てて毛布をかぶり直す。美沙、電子レンジから取り出したマグカップを重山の前に出して、

美沙　（グラゴニア語で）オレップク（どうぞの意）。

重山　え？

美沙　（グラゴニア語で）オレップク、ミルミル（どうぞ、ミルクですの意）。

重山　（毛布から頭を出して）どうしたの、そのグラゴニア語？

美沙　（笑って）重ちゃんが練習してたから覚えちゃったんじゃん。オレップク、ミルミル。

重山　（グラゴニア語で）チェックラ・チェックラ（とってもありがとうの意）。

美沙　オレップク、ミルミル。

重山　チェックラ、、、チェックラ。

重山、起き上がる。

美沙　やっといつもの重ちゃんだ！

美沙、重山にホットミルクのマグカップを渡す。重山、ホットミルクを一口飲む。

美沙　どうして、会社行きたくなくなっちゃったの？　まさか失恋？

重山　はい？

美沙　おばあさんになっても、失恋すると胸が痛む？

重山　私まだ自分のこと、おばさんのつもりでいるんだけど。

美沙　でも、美沙のおばあちゃんと同い年だよ。

重山　そうね、来年から前期高齢者だった。

美沙　ねえ、おばあさんになると何が変わる？

重山　、、まず深く眠れなくなる。

美沙　重ちゃん、寝てたじゃん。

重山　寝転んでいても、布団の中に入っても、目をつぶっていても、なかなか眠れなくなるのよ。

美沙　じゃあ夢は見ない？

重山　それが見るの。短い夢をたくさん。それも大切じゃない人の夢をたくさん見る。今まで出会ってきた、大して大切じゃない、どうでもいい人たちが突然夢の中に出てくる。それで、この人はあの人だって思い出しているうちに、トイレで目が覚めちゃうんだ。あまり話をしないうちに。私がこの歳だから、そういう人たちってもう生きてんだか死んでんだかわからないけど、でもまだ私の心の中に生きていることに驚く。

美沙　大切な人の夢は見ない？

重山　そうねぇ。不思議と見ない。時々、起きてる時に思い出すからかな。

ドアベルが鳴る。

美沙　誰だろう？

重山　、、、

美沙　私、出ようか？

重山　会社の人だったら出なくていいから。

美沙　わかった。任せといて。

美沙、インターホンに出る。

美沙　はい。

常田の声　どうも。俺です。常田。

美沙　どうぞ。

重山　え？

美沙、玄関へ出て行こうとするが、

重山　美沙ちゃん、その人、会社の人だから。
美沙　え？　でも「俺です」って言ったよ？
重山　もう！
美沙　親しげだったよ？
重山　会社の人も「俺です」って言うから。
美沙　どうする？
重山　、、いいわよ、入れて。
美沙　わかった。任せといて。

美沙、玄関へ出て行く。重山は急いでお化粧（眉毛を書く等）をし、テーブルの上を少しだけ整え、毛布をたたみながら、美沙と常田の会話を聞いている。

美沙の声　重ちゃんの会社の人なんですか？
常田の声　え？　あ、はい。
美沙の声　でしたらちゃんと名乗ってください。
常田の声　あ、はい、すみませんでした。私、月銭社の社長の常田吾郎と申します。はじめまして。
美沙の声　ちょっと待っててください。

美沙、戻ってくる。

美沙　（秘書風に）重山さん。月銭社の社長の常田さんです。

重山、テーブルを片付けている。片付け終えて、美沙に常田を呼んでいいという合図を送る。

美沙　（常田に）どうぞ。

常田、入って来る。

常田　お久し振りです。
重山　お久し振りです。（美沙に）美沙ちゃん、少し二人きりにさせてもらえないかな？
美沙　え？
重山　お仕事のことで社長と話さなきゃならないから。
美沙　うん、わかった。（常田に）ホットミルクかコーヒー淹れますか？
常田　すぐ帰りますんで、大丈夫です。
美沙　はい。

美沙は、ペコリと頭を下げて、出て行く。

常田　あの子は？
重山　私に懐いてるご近所の子です。
常田　そう。
重山　孫かと思いました？
常田　まさか。
重山　孫っていうよりは娘かしら。なんか母性本能をくすぐられちゃって、勉強を見てあげたり、ご飯作ってあげたりしたら、子猫が飼い主を信頼して、お腹出すみたいに懐いちゃったの。おまけに、私がグラゴニア語を勉強しているのを興味深そうに見てたから、グラゴニア語まで覚えちゃった。
常田　この時間にここにいるってことは、学校に行ってないのか？
重山　高校一年生なんですけどね。進学校に入学してすぐに馴染めなくなっちゃったみたい。とても頭がいい子なんですけど。
常田　つまり『受験ガイド』の被害者ってことか？

間。

重山　誰かが学校に行けなくなるのは、何か一つだけが原因じゃない。まして『受験ガイド』のせいなわけない。
常田　でも君はあの子と知り合って、「受験」そのものに批判的になったんじゃないの？
重山　ねえ、そういう話をしにいらしたんですか？
常田　違う。

常田はソファーに座り、

常田　君が一ヶ月も休んでいるから。心配になったんだ。
重山　で、クビを言い渡しに来た。
常田　どうしてそう噛みつくように言うんだよ？
重山　どうしてかしら。まだ歯があるうちに、昔の男の歯応えを記憶しておきたいのかもしれない。
常田　、、、
重山　、、、
常田　思ったより元気そうだ。なら言いにくいことも言える。
重山　やっぱりそうじゃない。
常田　ニュースは見てるの？
重山　どのニュース？
常田　グラゴニアがなくなったっていうニュース、とか。
重山　、、、見てる。
常田　空爆によって独裁者もろとも国家を破壊。小さな国だったとはいえ、二十一世紀で

も国が丸々無くなるってことがあるんだな。

重山　一時的なだけでしょ？ 国連の多国籍軍に占領されても、グラゴニアの人はまだそこにいる。暫定統治が終われば、新しい国としてきっと復興する。その日に向けて『グラ日・日グラ辞典』を出版したい。

常田　まだ現実を見られないのか？ グラゴニアは無くなったんだ。

重山　国がなくなったら言葉はなくなるの？

常田　復興には何十年とかかる。その日は二十年後か？ いや、三十年後かもしれない。俺たち、きっと生きてないぜ。

重山　私は生きてる。九十四歳。その時はグラゴニア文学の第一人者になってるんだ。

常田　、、、

重山　定年退職したら、翻訳家を目指そうと思ってる。

常田　グラゴニア語の翻訳家なら、誰も応援してくれないよ。

重山　あなたは？

常田　ここには出版中止を正式に決めたと言いに来た。

重山、ショックを受けて、一瞬、その場に座り込む。

常田　わかるだろ？ うちじゃ無理だって。『グラ日・日グラ辞典』も、『砂の薔薇』も。今となっては成功の芽が全くなくなってしまったからね。

重山　まだどこの出版社もやっていない言語なんだよ。この国で手掛けるのは、私たちが初めてで。

常田　遠い、ほとんどの日本人が行ったこともない国だ。しかもその国は、戦争を仕掛けて、逆に報復されて消滅したばかり。そんな国の言葉の辞書をなんで、うちみたいな小さな出版社が出さなきゃいけない？

重山　日本語には「火中の栗を拾う」って言葉もある。

常田　『グラ日・日グラ辞典』を作るのは、俺たちの仕事じゃなかったんだ。何十年後か、グラゴニアが元に戻った時に、次の世代の誰かが、、、

重山　じゃあ私たちは何をやったの？ 何をやってきた？

常田　、、、いい本をたくさん作ってきたじゃないか。

重山　でも残る本は？ 永遠にとは言わない。千年とは言わない。でも、でも、、、一冊ぐらい百年残る本を作った？

常田　、、、

重山　一冊でいいから、奇跡のような本を世に出したくて私はやってきた。なのに一冊も、、、もう編集者としての私の時間は終わる。

常田　百年残る本は無かったかもしれない。でも俺は、いや、俺たちは、誠実に本を作り売って来たよ。読む人たちの期待に応えてきた。

重山　あなたには子どもがいるけど、私には本しか遺せるものがないの。

常田　それを言うのか？

重山　だって、ずっと思ってたことだから。

常田　やめてくれ。昔のことと今を繋げるのは。俺たちが付き合ってたのはもう三十年以上前の話だろ？

重山　別に何かを恨んで言ってるわけじゃないよ。でも会社のあの会議室が今月からなくなって、いつかうちの会社もなくなって、

常田　（割り込んで）俺は俺たちの会社をつぶしたくないから、成功の見込みのない本は出せないって言ってるんだ。

重山　私には思い出だけしか残らないのに、その思い出だって（自分の胸を押さえて）ここに、ちゃんと残っているのかどうかわからないのに。

常田　、、、

重山　二年前、あなたが社長を譲られた時、私もグラゴニア語と出会ったの。見つけたって言い方のほうが正しいのかもしれない。子どもが初めて蛍を見つけたみたいな感じ。グラゴニア語のあの文字は、小人が踊るような文字は、私にとって、小さな光だった。自分の手だけは照らしてくれる光。見たことも聞いたこともなかった言語なのに、なぜか夢中になった。

常田　俺にはどうしてもわからないんだよ。君がなぜ、その見たことも聞いたこともなかった言語に、そんなにもこだわるのか？

重山　「ムルケアス」。

常田　それは単語？

重山　私が初めて出会ったグラゴニア語。「老木の香り」っていう意味。木は、大地の記憶を吸って、それを香りに変えて、この世界に放つ。老木の香りには、その木が生きてきた、あらゆる時代の匂いが詰まっている。だから「老木の香り・ムルケアス」には、「老人が生きた時間」という意味もある。

常田　、、、

重山　こんな意味を持った言葉がどうして生まれたんだろう。それも砂漠の国で。馬鹿みたいに考え始めて、それが楽しくて。その老木は、砂の大地で枯れずに生き残った一本だったんだろうか？　グラゴニアで暮らす人々は、その老木の香りを大切に嗅いだんだろうか。調べてもはっきりとしたことはわからなかった。でも、なんだか世界の謎の一つを、分けてもらえた気がした。それが始まり。一日に一つでも、知らない言語の、知らない単語を覚えることが、私を救ってくれた。

常田　俺にはわからない。

常田が部屋を出て行こうとするが、

常田　いつの間にか、君が遠くに行ってしまった気がするよ。実際、君は遠くの国に惹かれ、見えない国へ行ってしまったんだ。

重山　、、、

常田、部屋を出て行く。少し間があって、美沙が戻ってくる。

重山　美沙ちゃん。
美沙　ごめん。帰った振りして、トイレに隠れて二人の話を聞いてた。
重山　そう。
美沙　あの人、恋人？
重山　昔のね。
美沙　大切な人？
重山　大切だった人。
美沙　変わっちゃったの？
重山　一緒に暮らしてたの、三十年以上前だもん。
美沙　同じ「世界の謎」、愛してた？
重山　そうかもしれない。同じ「世界の謎」を。

ドアベルが鳴る。美沙、玄関の方へ退場。グラゴニアの民族衣装を着た鴨橋が入って来る。

重山　鴨橋先生。どうしたんですか？

美沙が、鴨橋のスーツケースを騒がしく押して、戻ってくる。

鴨橋　あなたの真似です。身体で考えたんです。
重山　、、、
鴨橋　戦争が終わったのは知ってますよね？
重山　はい。グラゴニアは無くなったって。
鴨橋　私、これからグラゴニアがあったところに行って来ようと思うんです。
重山　（スーツケースをチラッと見て）これから？
鴨橋　はい、カレーラ・ヨゼヨゼに会いに行こうと思って。
重山　居場所わかったんですか？
鴨橋　いいえ。でも日本にいるより、会える可能性は高いでしょ？
重山　もし会えたとして、その後はどうするんですか？ カレーラは、独裁者に心の底から同調していたかもしれないんですよ？
鴨橋　それでも、カレーラと会いたいんです。もう一度、あの人の言葉と向き合うために。「まるで焼け焦げたように花も茎も根も漆黒に変わり、それでも薔薇は、美しく咲き続けた。」あの国の負の歴史も、今回の戦争に至る背景も、国が消滅するという結末さえも、カレーラの言葉の中に刻み込まれていたのかもしれなくて。あの人の影も全部ひっくるめて、もっと深く理解して、私はカレーラ・ヨゼヨゼの言葉を、日本の読者に届けたい。グラゴニア語の、翻訳者として。
重山　グラゴニアがもう無くても？
鴨橋　言葉は消えやしない。読まれる回路さえあれば。記憶してくれる誰かがいれば。
重山　、、、

鴨橋　行きますね。
重山　はい。
鴨橋　待ってます。グラゴニアがあったところで。
重山　、、、

鴨橋、行きかけるが、

美沙　先生！
鴨橋　、、はい。
美沙　私も先生って呼んでいいのかな？
鴨橋　あなたは、重山さんの高校生のお友だちだ？
美沙　私のこと知ってるんですか？
鴨橋　うん。
美沙　嬉しい。

美沙、突然、テーブルに走って駆け寄り、ポストイットを手に取る。

鴨橋　え？

美沙、一番最初は鴨橋のスーツケースにポストイットを貼り、続いて、部屋中に貼り始める。

重山　何してるの？

音楽が流れる。

美沙　ねえ、葉っぱみたいじゃない？
鴨橋・重山　、、、
美沙　この部屋を言の葉でいっぱいにしたいの。先生、ありったけのグラゴニアの単語を、このポストイットに書いていって。この部屋は、重ちゃんの練習帳！ 重ちゃんは先生の背中を追いかけて、グラゴニア語の翻訳者を目指すんだから。
鴨橋・重山　、、、
美沙　でね、重ちゃんが覚えたら、今度は私が覚える。重ちゃんの背中を追いかけて、次は私がグラゴニア語の翻訳者を目指すんだ。
鴨橋　、、、わかったわ。

美沙、重山にもポストイットを手渡し、重山も床やテーブル、ソファーにポストイットを貼っていく。鴨橋はポストイットに美沙や重山がポストイットを貼るよりも早く、グラゴニアの単語を書いていく。

美沙　先生、速い！

鴨橋が一つ、ポストイットに、単語を書く度に、そこから、茎が生え、花が咲く。美沙、テーブルの上に山になっていた剥がされたポストイットの束を手ですくい、そのままソファーの上に立つ。

美沙　見て。

鴨橋と重山、立ち止まり、美沙を見る。美沙、手の中のポストイットを自分の息で吹き飛ばすと、ポストイットの紙吹雪が舞う。

美沙　言の葉が、生い茂るのが見えるよ。

三人には、部屋中に言の葉が舞い散っていくのが見えたような気がする。

終わり。

参考文献

・『「その他の外国文学」の翻訳者』白水社編集部・編

・『日本語が消滅する』山口仲美・著　（幻冬舎新書）

・『オーウェルの薔薇』レベッカ・ソルニット作、川端康雄／ハーン小路恭子・訳